

仙台市文化財調査報告書第369集

一本杉遺跡第2次調査

2010年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第369集

一本杉遺跡第2次調査

2010年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日ごろからご理解、ご協力を賜り感謝申し上げます。

市内には、旧石器時代から近世にいたるまで数多くの埋蔵文化財が遺されております。当教育委員会といたしましても、先人たちの貴重な文化遺産を保護し、保存・活用を図りながら次の世代に継承していけるよう努めているところであります。

一本杉遺跡は、仙台市の西部、青葉区落合に所在する遺跡です。この場所は、農業後継者の養成を目的として昭和10年に創設された宮城県宮城農学寮のあった場所でもあります。この地域は、かつては水田の広がる田園地帯でしたが、国道48号線愛子バイパスの開通や上地区画整理事業の進展により、急速に開発、都市化が進行し人口が急増してきております。

今回の調査は、保育所創設整備事業に伴うもので、本報告書は昭和58年に実施された発掘調査に続く第2次調査の成果についてまとめたものです。

当教育委員会では、発掘調査状況の公開・活用を進めるため、調査の概要を紹介する広報板の掲示や遺跡見学会の開催など、今後もより多くの市民の皆様に興味を持っていただけるような活動を行っていきたいと考えております。そのためにも、今回の調査成果が、地域の歴史を解き明かしていくための貴重な資料となり、多くの方々に活用されれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行に際しまして、ご指導、ご協力くださいました皆様に深く感謝申し上げます。

平成22年3月

仙台市教育委員会
教育長 荒井 崇

例 言

1. 本書は、(仮称) 新栗生保育所創設整備事業に伴う埋蔵文化財の調査報告書である。
2. 発掘調査は、仙台市教育委員会の指導のもとに、株式会社玉川文化財研究所が行った。
3. 本書の作成及び編集は、仙台市教育委員会文化財課工藤信一郎・荒井 格の監理のもと、株式会社玉川文化財研究所石川真紀・西本正恵が行った。
4. 本書の執筆は、工藤信一郎の監理のもとに下記の通り行った。
第1章……………工藤信一郎
第2章～第5章、第7章……………石川真紀
5. 本書で掲載した土壌分析については、株式会社古環境研究所に依頼した。
6. 調査及び報告書作成に関する諸記録、出土遺物等の資料は、仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 土層註記に記載している土色は、「新版標準土色帖」(小山・竹原 1977)に基づいて認定した。
2. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1:25,000『仙台西南部・仙台東南部』の一部を使用している。
3. 調査の際の平面座標基準は、世界測地系平面座標X系を基にしている。
4. 調査において検出された遺構に関しては、以下の遺構略号を使用した。
SK 土坑 S1 竪穴住居跡 SX 性格不明遺構 P ビット
5. 本書に使用した遺構挿入縮尺は、1/40・1/20であり、各図にはそれぞれスケールを付した。
6. 本書の遺構図版に使用したスクリーントーンの凡例は、下記の通りである。

焼土範囲 

7. 遺物の登録は種別ごとに行い、番号の前に以下のような略号を付している。
C 土師器(非ロクロ調整) D 土師器(ロクロ調整) E 須恵器 I 陶器
K 石器・石製品 N 金属製品 O 自然遺物
8. 遺物実測図に使用したスクリーントーンの凡例は以下の通りである。

黒色処理  磨面 

9. 遺物実測図の縮尺は、下記の通りである。なお、各図にはそれぞれスケールを付した。
土器類・礫石器・金属製品 1/3
10. 掲載した遺物写真の縮尺は、原則として遺物実測図と同じ縮尺とした。

目 次

序 文
例 言
凡 例

第1章 調査の概要	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査要項	1
3. これまでの調査	1
(1) 第1次調査(昭和58(1983)年)	1
(2) 平成18(2005)年確認調査	2
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	2
第3章 調査の方法と概要	4
1. 調査方法	4
(1) 調査区の設定	4
2. 調査概要	5
(1) 調査経過	5
(2) 測量基準・図面の作成	5
(3) 遺物の取り上げ・調査記録の作成	5
(4) 遺構登録番号	5
(5) 調査報告書作成業務	5
第4章 基本層序	6
第5章 検出遺構と出土遺物	8
(1) 竪穴住居跡	8
(2) 土 坑	13
(3) 性格不明遺構	20
(4) ビット	20
(5) 遺構外出土遺物	22
第6章 自然科学分析	23
第7章 ま と め	26

写真図版
報告書抄録

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	3	第10図 S14 竪穴住居跡出土遺物(1)	12
第2図 一本杉遺跡調査区位置図	3	第11図 S14 竪穴住居跡出土遺物(2)	13
第3図 調査区配置図(昭和58年度、平成18・21年度)	4	第12図 SK1 土坑平面図・土層断面図	14
第4図 グリッド配置図	5	第13図 SK1 土坑出土遺物(1)	15
第5図 西区東壁土層断面図	6	第14図 SK1 土坑出土遺物(2)	16
第6図 遺構配置図	7	第15図 SK1 土坑出土遺物(3)	17
第7図 S14 竪穴住居跡平面図・土層断面図	9	第16図 SK2 土坑平面図・土層断面図	18
第8図 S14 竪穴住居跡SK1~4、6~8 土層断面図	10	第17図 SK2 土坑出土遺物	19
第9図 S14 竪穴住居跡カマド平面図・ 土層断面図	11	第18図 SX1 焼土跡平面図・土層断面図	20
		第19図 ビット土層断面図(1)	20
		第20図 ビット土層断面図(2)	21
		第21図 遺構外出土遺物	22

写真図版目次

写真図版1 調査区全景(1)	31	3. SK1 遺物出土状況(1層上面、北から)	
1. 調査区全景(南東から)		4. SK1 遺物出土状況(1層上面、北から)	
2. 西区全景(北東から)		5. SK1 遺物出土状況(1層上面、西から)	
写真図版2 調査区全景(2)	32	6. SK1 遺物出土状況(1層下面、南から)	
1. 東区全景(南から)		7. SK1 土層断面(南から)	
2. 西区S14、SK1、SK2 全景(南東から)		8. SK1 完掘全景(南から)	
写真図版3 竪穴住居跡	33	写真図版6 土坑(3)・焼土跡	36
1. S14 全景(西から)		1. SK2 遺物出土状況(南から)	
2. S14 カマド遺物出土状況(西から)		2. SK2 遺物(刀子)出土状況(南西から)	
3. S14 カマド土層断面(東から)		3. SK2 遺物出土状況(北から)	
4. S14 灰白色火山灰出土状況(西から)		4. SX1 焼土跡検出状況(南から)	
5. S14 SK7・8土層断面(東から)		5. SX1 焼土跡土層断面(南から)	
写真図版4 土坑(1)	34	写真図版7 竪穴住居跡出土遺物	37
1. SK1、SK2 遺物出土状況(北から)		写真図版8 土坑出土遺物(1)	38
2. SK1 遺物出土状況(1層上面、南から)		写真図版9 土坑出土遺物(2)	39
写真図版5 土坑(2)	35	写真図版10 土坑出土遺物(3)・遺構外 出土遺物	40
1. SK1 遺物出土状況(1層上面、西南から)			
2. SK1 遺物出土状況(1層上面、南から)			

第1章 調査の概要

1. 調査に至る経緯

一本杉遺跡は、農業後継者の養成を目的に昭和10年に創設された宮城県宮城農学寮があった場所であり、その後は、宮城県立広瀬高等学校や宮城県宮城広瀬住宅などの建設に伴い、宮城県教育委員会により昭和56(1981)・58・59年に発掘調査が行われている。

当該地については昭和58年の旧宮城町教育委員会による第1次調査後、NTT青葉通ラインマンセンターとして利用されていたが、業務終了に伴い解体整地され、その後敷地東側については平成18年に店舗が建設されていた。西側については幾度か建築計画がだされ、その都度協議が行われ、確認調査等も実施されていたが、実際には建築されることなく空地となっていた。

平成21年6月に、仙台市子供未来局において(仮称)新栗生保育所創設整備事業が計画されたことから、埋蔵文化財の取り扱いについて協議がだされ、協議の結果、建築予定範囲のうち、昭和58年調査時に遺構確認にとどめた範囲を対象に発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、仙台市教育委員会の指導・監理の下、株式会社玉川文化財研究所が受託し調査を行った。

2. 調査要項

遺跡名：一本杉遺跡

所在地：仙台市青葉区落合4丁目446番2

調査原因：(仮称)新栗生保育所創設整備事業に伴う埋蔵文化財の事前調査

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会文化財課調査係 主査 荒井 格 主任 工藤信一郎 文化財数論 熊谷敏哉

調査員 石川真紀 株式会社玉川文化財研究所 調査補助員 西本正憲 株式会社玉川文化財研究所

調査期間：2009年(平成21年)9月8日～2009年(平成21年)10月22日

調査対象面積：建築予定面積1200㎡のうち、未調査部分450㎡

調査面積：西区496㎡ 東区80㎡

3. これまでの調査

(1) 第1次調査(昭和58(1983)年)

NTT青葉通ラインマンセンター建設に伴う調査として、旧宮城町教育委員会により遺構の有無及び範囲を確認するための確認調査が実施されている。この調査では、平安時代の堅穴住居跡4軒が確認され、そのうち建築範囲内に確認された2軒について、調査区を拡張したうえで本調査が行われている。その他の部分については、簡易舗装の駐車場用地となることから遺構は保存されると判断され、遺構確認後に埋め戻しを行っている(第3図)。S11住居跡は、残存部分では南北3.5m×東西3mで、方形プランを呈する住居と思われるが、削平により遺構の残存状況はよくなかった。S12住居跡は、南北5m×東西5.7mの方形プランの住居で、東壁中央やや南よりの位置にカマドが造られている。上部の削平により煙道は確認されなかったが、燃焼部の規模は奥行1.2m×幅0.7mで、袖部に自然石をすえ、粘土を貼り付けて構築しており、自然石を用いた支脚がある。柱穴は確認されなかったが、カマドの南側に貯蔵穴があり、周溝が南壁部分を除いた壁沿いに巡っている。

なお昭和58年時点では、現在の一本杉遺跡は、一本杉A遺跡、一本杉B遺跡、農学寮跡遺跡と分かれて登録されており、第1次調査地点は、一本杉B遺跡の範囲内となっていた。

(2) 平成18(2005)年確認調査

敷地内東側について店舗建設計画がだされ、低層のベタ基礎構造の建築計画であることから、掘削が遺構面に及ぶと判断された範囲を対象とした確認調査を8月に実施しているが、遺構・遺物は確認されなかった。

また西側部分については、マンション建設計画に伴い、第1次調査の未調査部分である敷地内北側(JR仙山線側)を対象とした確認調査を9月に実施しているが、掘削により遺構・遺物は確認されなかった。

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

一本杉遺跡は仙台市の北西部、青葉区下愛子字森下、字一本杉付近に広がる遺跡である。旧来までは、農学寮跡遺跡・一本杉A遺跡・一本杉B遺跡として調査が実施されているが、現在ではこれらを含めて一本杉遺跡として捉えられている。遺跡の範囲は東西約900m、南北約350m、総面積は約315,000㎡に及んでいる(第2図)。

今回の調査地点は、当遺跡範囲の南端部に該当し、JR仙山線陸前落合駅の西方約500mに位置する(第1図)。地勢的には愛子盆地の東部にあり、広瀬川と芋沢川の合流点付近の広瀬川右岸の段丘上に立地している。遺跡内の微地形は比較的平州であるが、北東に向かって緩やかに傾斜している。標高は90~95mである。

宮城県遺跡地名表によると、旧宮城町内では137の遺跡が周知されている(宮城県教育委員会1998)。これらの多くは縄文時代及び奈良・平安時代に帰属する遺跡であり、中・近世の遺跡がこれに次いでいる。なお、旧石器時代及び古墳時代の遺跡については、現在のところ確認はされていない。

遺跡の分布状況を見ると、縄文時代の遺跡は各河川流域の河岸段丘や丘陵上に集中しており、奈良・平安時代の遺跡に関しては愛子盆地の低位段丘面にやや多くみられる。中世~近世にかけての遺跡については、館跡が比較的多くみられるほか、板碑や塚なども僅かながら確認されている。これらの遺跡の多くは愛子盆地周縁の丘陵部や広瀬川流域の段丘上に立地している。

本遺跡の周辺には、本遺跡の主体時期である平安時代の遺跡が幾つか知られている。南側の段丘上には③林林C遺跡・④二本松A遺跡・⑤林林B遺跡・⑥五輪塔遺跡・⑦館遺跡・⑧窪遺跡・⑨栗生遺跡があり、当該期の十師器や須恵器の散布地・包蔵地が確認されている。

今回報告する一本杉遺跡は、これまでに宮城県教育委員会や旧宮城町教育委員会によって、数回にわたる確認調査や本調査が行われている。これまでの一本杉遺跡の調査について年次順に概観する。ここでは、調査時における遺跡名をそのまま使用している。

農学寮跡遺跡では、昭和56年に二次にわたるトレンチ調査が宮城県教育委員会によって実施された。警察用地を対象に行われた第1次調査では、縄文時代の遺物である石匙1点が出土したのみで遺構等は確認されていない。一方、宮城県立広瀬高等学校用地を対象に行われた第2次調査では、調査区の北東部において縄文時代の竪穴住居跡1軒、土坑2基、埋設土器遺構7基のほか、奈良・平安時代の竪穴住居跡が1軒確認されている。当該地はグラウンド予定地として盛土されることから、実際に調査した遺構は縄文時代の埋設土器遺構3基のみである。その他の遺構に関しては、調査はせず埋め戻され保存がはかられている(宮城県教育委員会1982)。

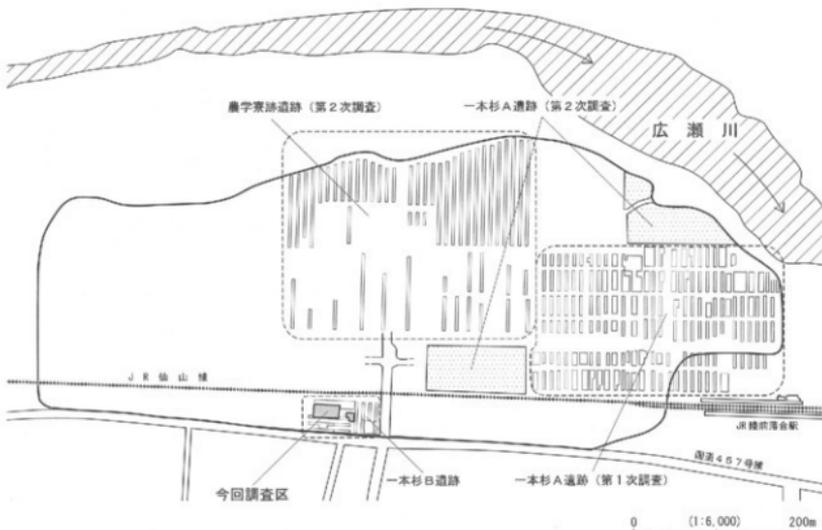
昭和58年には一本杉A遺跡第1次調査、翌年には第2次調査が行われている。一本杉A遺跡第1次調査では、奈良・平安時代の竪穴住居跡2軒、土坑3基が確認されている。特筆すべき遺物として、住居内のピットより「川」字の墨書がされた須恵器高台付塚が出土している。なお、一本杉A遺跡第2次調査では、後世の削平により遺構は検出されていない(宮城県教育委員会1985)。

また昭和58年には旧宮城町教育委員会により、一本杉B遺跡の確認調査及び本調査が行われている(第1次調査)。N・T・青葉通ラインマンセンター建設に伴う事前調査として、旧宮城町教育委員会により合計14本のトレンチ調査



- ①一本杉遺跡 (縄文・平安) ②棟林A遺跡 (縄文) ③棟林C遺跡 (縄文・奈良・平安) ④二本松A遺跡 (縄文・奈良・平安)
 ⑤棟林B遺跡 (奈良・平安) ⑥五輪塚遺跡 (縄文) ⑦磐船跡 (奈良・平安) ⑧窪遺跡 (奈良・平安) ⑨粟生遺跡 (奈良・平安)
 侍西廻跡 (中世・近世) ⑩稲田遺跡 (縄文・奈良・平安) ⑪上町A遺跡 (奈良・平安) ⑫上町A遺跡 (奈良・平安)
 ⑬観音A遺跡 (奈良・平安) ⑭観音堂遺跡 (縄文・平安) 侍南廻跡 (中世) ⑯惣海塚跡 (中世)

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 一本杉遺跡調査区位置図

が実施され、奈良・平安時代の竪穴住居跡が4軒発見されたほか、土師器や須恵器などの遺物が多数出土している。このうち調査対象となったのは竪穴住居跡2軒のみで、残りの2軒については構造物の範囲外であることから、埋め戻され保存がはかられた（宮城町教育委員会 1986）。

第3章 調査の方法と概要

1. 調査方法

(1) 調査区の設定

調査区の設定にあたり、昭和58年に実施された調査成果をもとに、建築予定範囲のうち未調査部分を対象とすることになったが、前回調査から20年以上経過していたことから、今回の調査に先行して7月に確認調査を実施し、遺構の残存状況の確認を行った。その結果を受けて前回S14住居跡を確認した部分を西区とし、S13住居跡を確認した部分を東区とし表土削削を実施した。調査区の一部では、既存建物の基礎に伴うと考えられる攪乱が確認されたが、それ以外では、耕作等による影響は受けていたものの、遺構確認面である明黄褐色（10YR6/6）粘土質シルトが確認された。しかし東区については、遺構確認面が削平を受けており、住居跡等の遺構は確認できなかった。東西調査区の間については、7月の確認調査時に表層からの攪乱が確認されていたことと、今回の調査でもこの部分では攪乱が確認されたことから調査区から除外した。



第3図 調査区配置図（昭和58年度、平成18・21年度）

2. 調査概要

(1) 調査経過

表土掘削はバックホウ(0.7m)により調査区の西側より開始し、表土除去後の遺構確認に伴う精査作業は人力掘削により実施した。遺構はⅢ層上面で検出された。全体的に天地返しや倒木痕などによる攪乱が著しく、まずはこれらを取り除くことから調査を開始した。調査の結果、平安時代の竪穴住居跡1軒と土坑2基のほか、焼土跡1基、ピット23基が確認された。なお、調査における写真撮影は、一眼レフカメラによるモノクロネガ及びびりバーザルカラーフィルムを使用し、デジタルカメラを併用した。

10月22日に調査区の埋め戻し作業及び調査事務所等の撤去作業を行い、現地での調査をすべて終了した。

(2) 測量基準・図面の作成

現地での測量・実測図作成については、トータルステーションによる機械計測・編集を基本とするが、土層断面図に関しては手実測により行っている。なお、方眼紙に書き込んだ手実測図については、スキャナーで読み込み、デジタルデータに変換して修正を加えた。また出土遺物詳細図に関しては、写真実測を併用した。

測量の際の座標数値は、世界測地系平面座標第X系を基準とした。

(3) 遺物の取り上げ・調査記録の作成

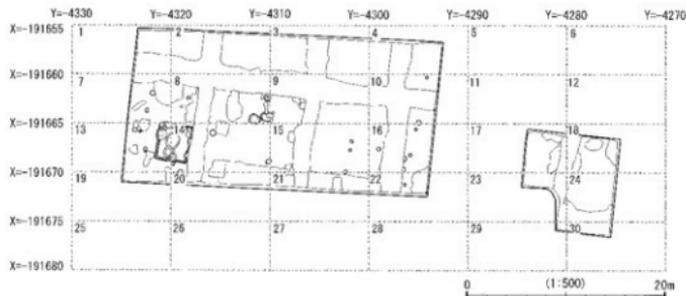
遺物の取り上げについては、測量基準とした平面区配図をグリッド名として使用し、原則として5×10mの単位で取り上げている。また必要に応じて、遺物の出土状況やレベル等を詳細に記録している。なお、調査で使用した平面区配図は以下に掲載した。

(4) 遺構登録番号

遺構登録番号は、竪穴住居跡については旧宮城町教育委員会による一本杉遺跡の本調査及び確認調査で付された名称を遺構番号とした。土坑やピットなどについては、新たに遺構番号を付した。

(5) 調査報告書作成業務

調査報告書作成に伴う整理作業については、神奈川県横浜市に所在する株式会社玉川文化財研究所で行った。整理作業の内容については、必要に応じて仙台市と確認・協議を行い、成果品においてはその都度点検・検査を受けた。

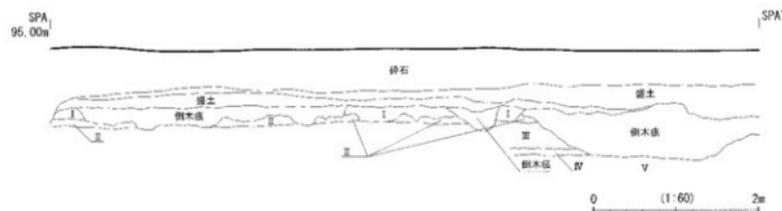


第4図 グリッド配置図

第4章 基本層序

今回の調査地点は、以前は宮城県宮城農学寮の農地であったが、N・T・T青葉通ラインマンセンター建設に伴う土取りにより耕作土上面が削平され、その後に盛土造成が行われていた。また建物解体後には一時駐車場として利用されていた経緯もあり、表土以下40～60cmまでは碎石を主体とする整地がなされていた。このため基本層序としては、盛土以下の旧耕作土をⅠ層とし、Ⅴ層の砂礫層までを確認した。遺構調査は前述したように、Ⅲ層上面で行った。

- Ⅰ層：旧耕作土。黒褐色（10YR3/1）シルトを主体とする。層厚で20cm前後が確認された。攪乱や天地返し、倒木痕により部分的に攪拌されている。
- Ⅱ層：層厚5～10cmよりなる暗褐色（10YR3/4）シルトを主体に構成される。層下位に明黄褐色シルトが若干量混在する。調査区全体で比較的均一に認められるが、Ⅰ層同様、天地返しや倒木痕により攪拌されている。
- Ⅲ層：明黄褐色（10YR6/6）を呈する粘土質シルト。層中に白色粒子を若干量含み、調査区全体に均一に堆積しており、層厚は30cm前後を測る。全体的に締まりと粘性を有する。
- Ⅳ層：粗砂を主体とする層で、色調は明黄褐色（10YR7/6）を呈する。堆積が薄く、調査区の南東側の一部分のみで確認された。層厚は5cm前後。
- Ⅴ層：径5～10cmの円礫を主体とする砂礫層。層中に酸化鉄が沈着する箇所もみられる。調査区内では北から南にかけて緩やかな傾斜が確認された。比高差で20cmを測る。



第5図 西区東壁土層断面図

基本層序土層註記表(A-A')

層位	土色	土性	備考	
碎石			碎石。	
盛土			盛土。転圧を受け強度に持まる。ガラス等を含む。	
盛土			盛土。層下半に鉄屑積層あり。	
倒木痕	10YR3/2	黒褐色	シルト	倒木痕及び天地返しの堆積土。黒褐色シルト主体であるが、ビニール片やガラス等を含む。
Ⅰ	10YR3/1	黒褐色	シルト	旧耕作土。締まりに欠ける。
Ⅱ	10YR3/4	暗褐色	シルト	層下位に明黄褐色シルトを含む。
Ⅲ	10YR6/6	明黄褐色	粘土質シルト	白色粒子を微量含む。
Ⅳ	10YR7/6	明黄褐色	粗砂	酸化鉄が沈着する箇所もみられる。
Ⅴ	10YR7/8	黄褐色	砂礫	φ5～10cmの円礫。粗砂より構成され、酸化鉄が沈着する箇所もみられる。



第 6 図 通称設置図

第5章 検出された遺構と遺物

今回の調査では西区から竪穴住居跡1軒、土坑2基、焼上跡1基、ピット23基が確認されている。遺構上面が後世の土取りにより削平されているほか耕作等の影響により攪拌されている部分も見受けられたが、全体として残存状態は比較的良好であった。東区からの遺構は確認されなかった。確認された住居跡については位置的にも第1次調査で検出されていたS14住居跡と判断されたことから、遺構番号については、その番号を使用した。竪穴住居跡と土坑2基については、出土遺物の年代観より平安時代前半の所産と判断される。2基の土坑は並列した位置関係にあり、2基とも堆積土内より多量の土器群が出土している。以下、各遺構ごとに詳述する。

(1) 竪穴住居跡

S14 竪穴住居跡（第7～11図）

[位置・確認面] 調査区の西側にあり、遺構の東壁が攪乱により壊されている。

[重複] 天地返しにより上部を削平されている。

[規模・形態] 南北3.85m、東西3.75mで、平面形は残存部分から隅丸方形と判断される。

[方向] カマドを基準にして軸方位を算出すると、 $N-100^{\circ}-E$ を示す。

[堆積土・構築土] 全部で21層に分層した。1～7層は住居堆積土。8～19層はカマドに関係する堆積である。8～13層は天井部及び壁の崩落土と考えられる。14層は焼土主体の土層で、カマドの使用面と考えられる。15～18層はカマド袖の構築土で、19層はカマド掘り方の堆積土にあたる。20層は周溝内のみ堆積している土層である。21層は貼床と考えられ、22層は住居掘り方の堆積土である。

[壁面] III層中を壁面とし、壁高は10～24cmが残存する。立ち上がりは垂直に近い状態である。

[床面] 21層上面を床面とする。明黄褐色シルト塊を多く用いた貼床で、カマド周辺が僅かに窪んでいる。この窪みは竪穴の使用過程で形成されたものと考えられるが、明瞭な硬化面は確認されなかった。また床面上には準大の川原石が多く点在していた。

[柱穴] 床面からは検出されていない。周溝内より小規模なピットが3基確認されており、壁柱穴構造をとる竪穴の可能性も考慮される。

[周溝] カマド付近と北東隅で途切れる。幅は15～24cm、深さは8～12cmである。堆積土は灰黄褐色シルトを基質とし、明黄褐色シルト塊が散見される。周溝底面より小規模なピットが3基確認されている。北東隅及び南西隅、北辺のほぼ中央よりそれぞれ1基ずつ確認されている。規模は径21～28cmで、深さは5～12cmである。

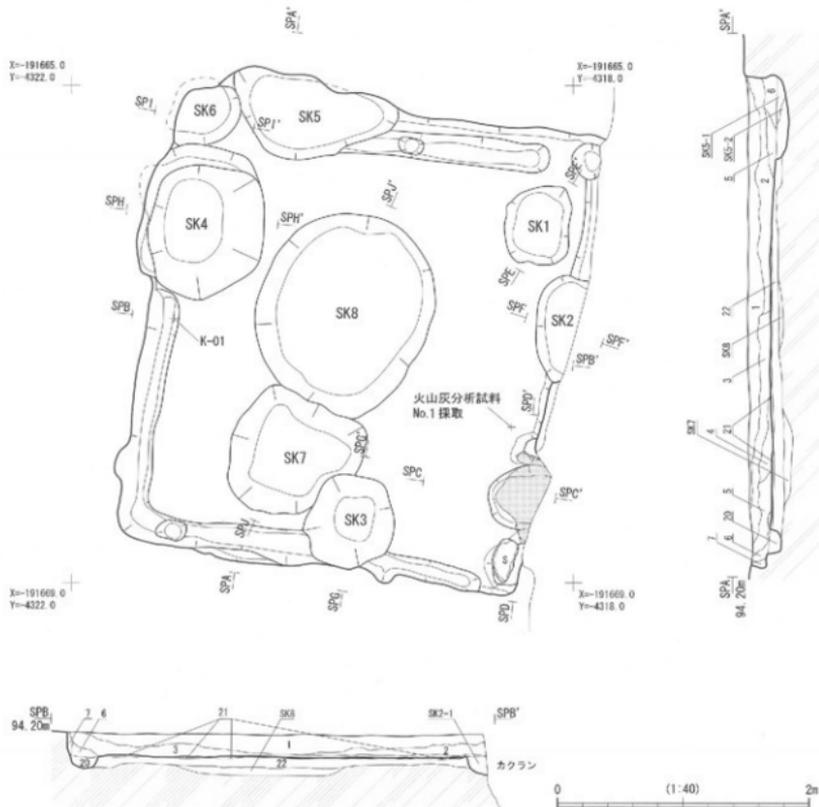
[カマド・煙道] カマドは東辺の南隅に設置された、いわゆる隅カマドである。燃焼部～煙道部にかけては攪乱により壊されている。袖は壁に対してほぼ垂直に伸び、袖には自然産が用材として用いられていた。両袖部域大幅(外幅)は1.3m、奥行きは残存部分で最大43cmで、燃焼部からは土師器坏・甕の破片が出土している。またカマド左袖の北側からは、灰白色の火山灰塊が床面直上より出土しており、出土状況からカマドの構築に関連して持ち込まれた可能性も考慮される。なお、この灰白色火山灰については分析試料として採取し、指標となる火山灰との同定分析を実施している。

[その他の施設] 住居内床面上より土坑6基(SK1～6)、掘り方から土坑2基(SK7・8)を確認した。

SK1は北東隅に位置し、長軸62cm、短軸48cm、深さは14cmである。平面形は楕円形で、断面形は皿状を呈する。SK2は東壁のほぼ中央に位置し、東側が攪乱により壊されている。規模は長軸で86cm、深さは14cmを測り、平面形は残存部分より楕円形と判断される。SK3は東壁のほぼ中央に位置し、周溝を壊して構築されている。規模は長軸75cm、短軸70cmで、平面形は四隅が形づくられている点を考慮すると、隅丸方形の範疇で捉えられる。深さは

25cmで、断面形は弧状を呈する。堆積土には焼土や炭化物のほか灰を多く含む。SK4は北西隅に位置し、西側が堅穴の西壁に接している。平面形は楕円形で、規模は長軸125cm、短軸100cm、深さは24cmである。SK5は北壁中央より西寄り位置し、北壁を挟るようにして構築されている。規模は長軸125cm、短軸70cmで、平面形は不整な楕円形である。深さは8cmと非常に浅く、断面形は皿状を呈する。SK6は北西隅に位置し、堅穴の壁面を挟り込んで構築されている。径55cm内外の円形で、深さは28cmである。SK7は南西隅に位置する。平面形は不整形、規模は長軸102cm、短軸95cm、深さは20cmを測る。SK8は中央よりやや南西寄りに位置する。規模は長軸156cm、短軸137cm、深さは13cmを測り、平面形は比較的均整のとれた楕円形を呈する。

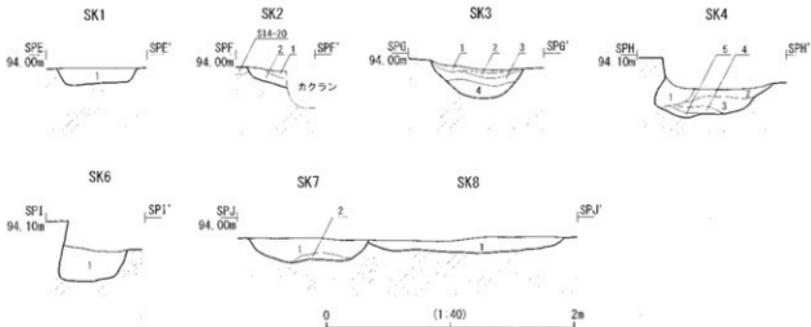
[掘り方] 底面は比較的平坦であるが、堅穴住居跡中央より壁際に向かって緩やかに傾斜している。



第7図 S14 堅穴住居跡平面図・土層断面図

S14 竅穴住居跡埋土誌記表

部位	層位	土色	土性	備考
埋土	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	φ1~2cm 10YR5/6 明黄褐色シルト塊を少量、φ3~5mm 炭化物を微量含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト	φ2~3cm 明黄褐色シルト塊を微量含む。
	3	10YR3/3 暗褐色	シルト	10YR3/1 黒褐色シルトを微量、明黄褐色シルト塊をやや多く含む。
	4	10YR4/3 暗褐色	シルト	φ1cm 塊の明黄褐色シルト塊を微量含む。
	5	10YR3/2 黒褐色	シルト	φ1cm 塊の明黄褐色シルト塊を微量、φ2~3mm 炭化物を微量含む。
	6	10YR3/1 黒褐色	シルト	10YR3/4 暗褐色シルトを少量含む。
	7	10YR2/3 黒褐色	シルト	塊体、φ1~2cm 炭化物を微量含む。
カマド	8	10YR3/3 暗褐色	シルト	φ3~5mm 炭化物を微量、φ1~2cm 10YR5/6 明黄褐色シルト塊を少量含む。
	9	10YR3/2 暗褐色	シルト	φ3~5mm 炭化物を少量、焼土を微量、明黄褐色シルト塊を微量含む。
	10	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	φ3~5mm 炭化物を少量、焼土を少量、10YR5/4 明黄褐色粘土質シルトを少量含む。
	11	10YR6/4 灰黄褐色	シルト	黒褐色シルトを微量、焼土塊を少量含む。
	12	10YR3/2 黒褐色	シルト	φ3~5mm 炭化物を微量、φ5~10cm 焼土を少量、灰黄褐色粘土質シルトを微量含む。
	13	10YR5/3 灰黄褐色	粘土質シルト	炭化物を少量、焼土を微量含む。
	14	5YR4/6 赤褐色	シルト	焼土主体、炭酸石灰化している。
	9	10YR4/6 褐色	シルト	明黄褐色シルトを少量、黒褐色シルトを微量含む。焼熱した土化。
	16	10YR4/2 黒褐色	シルト	灰黄褐色シルトを多数状に含む。
	17	10YR5/4 灰黄褐色	シルト	明黄褐色シルトを多数状に少量含む。
	18	10YR3/4 暗褐色	シルト	黒褐色シルトを少量含む。
	19	10YR3/4 暗褐色	シルト	黒褐色シルトと明黄褐色シルト塊を少量含む。
同層	20	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	塊体、φ1~2cm 明黄褐色シルト塊を少量、黒褐色シルトを微量含む。
竅穴	21	10YR5/6 黄褐色	シルト	10YR3/2 黒褐色シルトを微量、明黄褐色粘土質シルトをやや多く含む。部分的に硬化している。
竅入り方	22	10YR3/4 暗褐色	シルト	黒褐色シルトと明黄褐色シルト塊を多数状にやや多く含む。



第 8 図 S14 竅穴住居跡 SK1~4、6~8 土層断面図

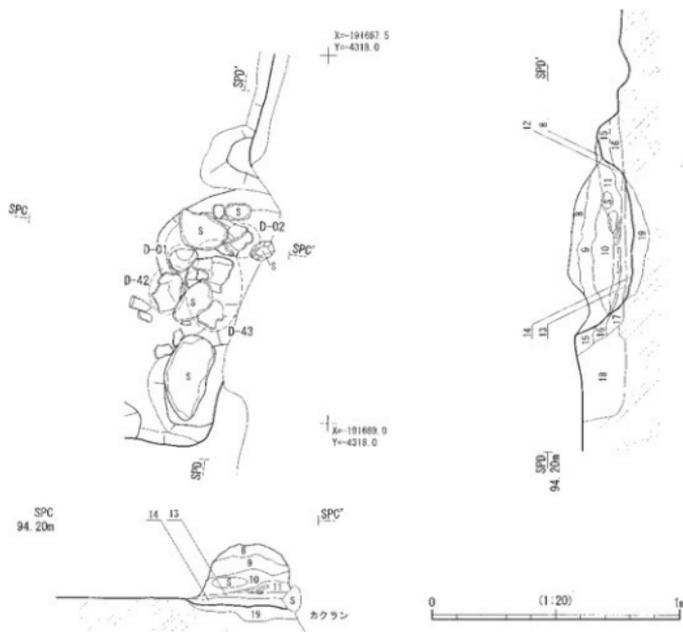
S14 竅穴住居跡施設埋土誌記表

部位	層位	土色	土性	備考
SK1	1	10YR4/1 褐色	シルト	φ2~3cm 明黄褐色シルト塊を少量、黒褐色シルトを多数状に少量含む。
	2	10YR4/1 褐色	シルト	黒褐色シルトを微量、粗砂粒を微量含む。
SK2	1	10YR3/1 黒褐色	シルト	φ1cm 塊の明黄褐色粘土質シルトを少量含む。
	2	10YR3/4 暗褐色	シルト	φ2~3mm 炭化物を少量、焼土を微量含む。
SK3	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	焼土を微量、黒褐色シルトを微量含む。
	2	10YR5/6 黄褐色	シルト	φ3~5mm 炭化物を少量、焼土を少量、灰をやや多く含む。
	3	10YR6/4 灰黄褐色	シルト	φ5~10cm 炭化物を少量、焼土を少量、灰を少量、黒褐色シルトを微量含む。
SK4	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	φ2~3cm 明黄褐色シルト塊を少量、φ3~5mm 炭化物を微量含む。
	2	10YR3/4 暗褐色	シルト	φ3~5mm 炭化物を少量、焼土を微量、φ1~2cm 炭化物を微量含む。
	3	10YR4/4 褐色	シルト	φ5~10cm 明黄褐色シルト塊を微量含む。
	4	10YR3/1 黒褐色	シルト	暗褐色シルトを多数状に少量含む。
	5	10YR6/6 明黄褐色	シルト	黒褐色シルトを少量、粗砂粒を微量含む。
SK5	1	10YR4/4 褐色	シルト	φ2~3cm 明黄褐色シルト塊を少量含む。
	2	10YR3/4 暗褐色	シルト	黒褐色シルトを少量含む。
SK6	1	10YR4/4 褐色	シルト	φ2~3cm 明黄褐色シルト塊を少量、黒褐色シルトを多数状に少量含む。
	2	10YR5/4 暗褐色	シルト	黒褐色シルトを少量含む。
SK7	1	10YR5/4 暗褐色	シルト	黒褐色シルトを少量含む。
	2	10YR6/6 明黄褐色	シルト	黒褐色シルトを少量、粗砂粒を微量含む。
SK8	1	10YR4/1 褐色	シルト	φ2~3cm 明黄褐色シルト塊を少量、黒褐色シルトを多数状に少量含む。

S14 竪穴住居跡建設観察表

遺構名	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	備考
SK 1	楕円形	62 × 48	14	
SK 2	楕円形	86 × 48	14	
SK 3	円形	75 × 70	25	洞中に焼土・炭化物を含む。
SK 4	楕円形	125 × 100	24	

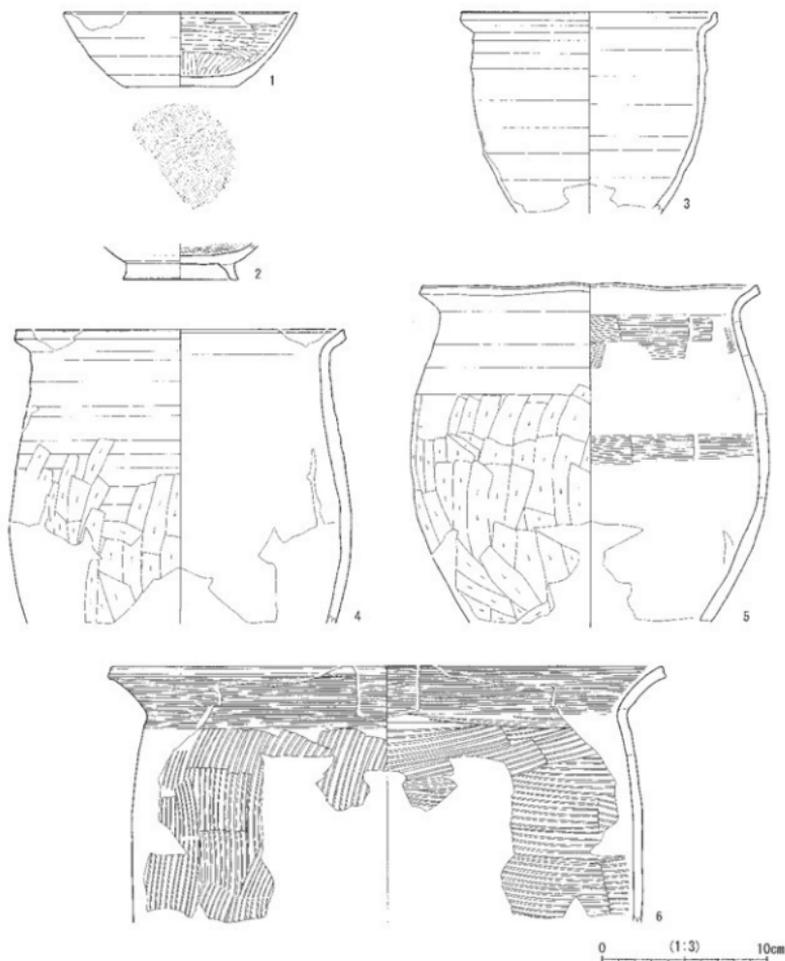
遺構名	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	備考
SK 5	楕円形	125 × 70	8	
SK 6	円形	55 × 55	28	
SK 7	不整形	102 × 95	20	床下土坑
SK 8	楕円形	156 × 137	18	床下土坑



第9図 S14 竪穴住居跡カマド平面図・土層断面図

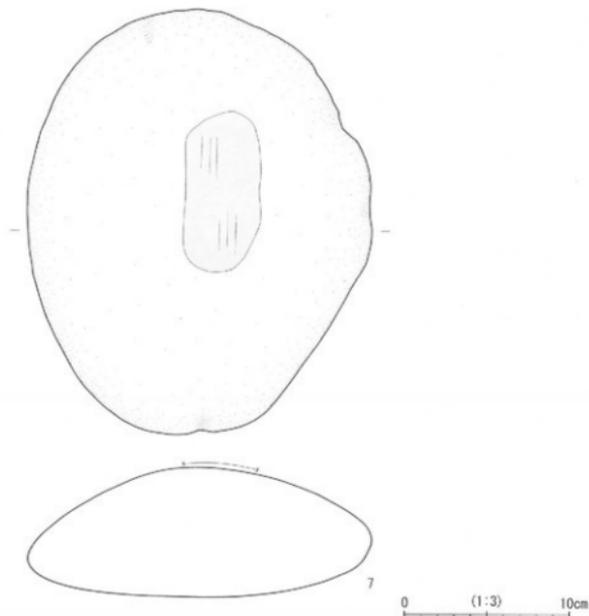
〔出土遺物〕 堆積上中、床面、カマド内、土坑等から土師器・須恵器・礫石器等が出土した。図示し得た遺物は、土師器環1点、同高台付環1点、同甕3点、同小甕1点、礫石器1点である。破片資料には土師器環・高台付環・甕があり、環には内外面に黒色処理が施されたものもみられる。須恵器では環・甕・壺等の小破片が出土している。

1はロクロ調整された土師器環で、いわゆる表杉ノ入式に比定される資料である。器面はやや内湾気味に立ち上がり、内面には放射状のヘラミガキが施される。底部の切り離し技法は回転糸切りであるが、外周部が手持ちヘラケズリにより再調整されている。2はSK8より出土した土師器高台付環で、内面にヘラミガキと黒色処理が施されている。高台部はいわゆる貼付高台である。3はロクロ調整のみで製作された小甕で、胴部外面に煤が付着している。4は長胴甕、5はやや胴振りの甕で、ともにロクロ調整された後に胴部下半を縦位方向のヘラケズリにより再調整している。6はSK3より出土した長胴甕で、内外面にハケメ調整が顕著に認められる。



第10図 S14 竪穴住居跡出土遺物 (1)

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	口径×底径×器高 (cm)	外面調整	内面調整	備考	写真 図版
1	D-01	カマド	11層	土師器	坏	14.2×6.7×4.6	口クロナデ、底部回転未切り→底部外周手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ		7
2	D-31	SK8	1層	土師器	高台付坏	—×7.0×(2.2)	口クロナデ、底部回転未切り→高台縁付一周縁部ナデ	ヘラミガキ	内面黒色処理	7
3	D-02	カマド	11層	土師器	甕	15.6×—×(12.4)	口クロナデ	口クロナデ		7
4	D-43	カマド	11層	土師器	甕	20.1×—×(18.0)	口クロナデ、頸部縁位ヘラケズリ	口クロナデ		7
5	D-42	カマド	11層	土師器	甕	20.6×—×(21.7)	口クロナデ、頸部縁位ヘラケズリ	口クロナデ		7
6	C-01	SK3	1層	土師器	甕	34.0×—×(15.6)	口縁部口クロナデ、胴部縁位ハケメ	口縁部口クロナデ、胴部縁位ハケメ		7



第11図 S14 竪穴住居跡出土遺物(2)

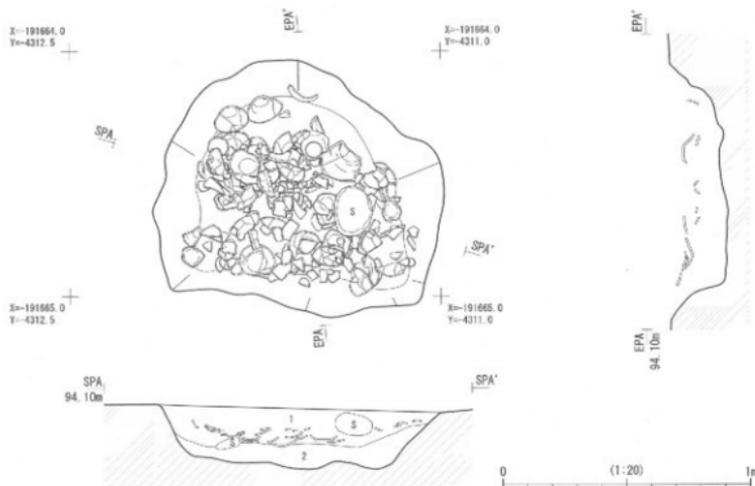
図版 番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	長さ×幅×厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考	写真 図版
7	K-01	S14	下層	石製品	石皿	26.1×21.0×8.5	5650	安山岩	完形基、層1面(平)	7

(2) 土坑 (第12～17図)

SK1 土坑 (第12～15図)

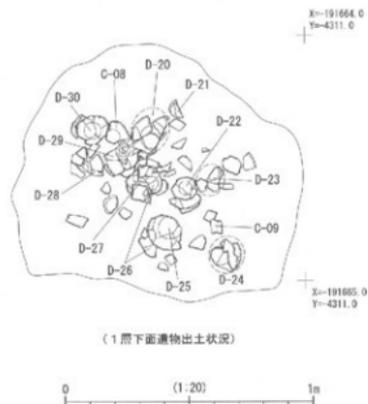
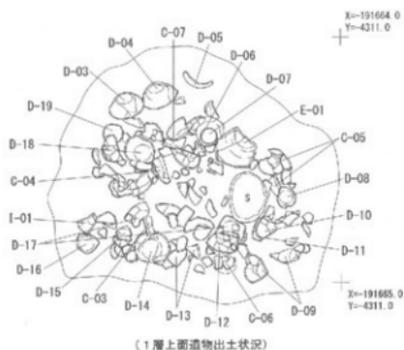
調査区のほぼ中央より確認された。上面が天地返しにより一部削平されているが、遺構間の重複関係はない。形状は北側が弧状となるが、北西を除く三隅が形づくられている点を勘案すると、方形と捉えることが妥当と考えられる。規模は長軸116cm、短軸100cm、深さは25cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、底面は比較的平坦である。堆積土は2層に区分され、焼土や炭化物を多く含む上層からは多量の土器が出土している。

出土遺物には内面黒色処理が施された土師器坏を主体に、土師器では高台付坏、長胴甕、小甕があり、須恵器では坏、高台付坏、甗などがみられる。そのほかには灰軸陶器の長頸瓶、擦り面が観察される礫石器が出土している。このうち図示したものは以下の44点である。1～21はロクロ調整された土師器坏で、内面はヘラミガキ後に黒色処理が施されている。器形としてはやや内湾気味に立ち上がるものが主体であるが、口唇部がやや外反するものもみられる。底面の切り離し技法は回転糸切りであるが、5・14・16～18は体部下端にのみ手持ちヘラケズリによる再調整がなされている。26は内外面に黒色処理が施された小型の坏で、内外面の調整は細かいヘラミガキである。22～25は土師器高台付坏ですべて貼付高台である。32は底面に放射状のミガキが施された土師器坏である。33～40は非ロクロ土師器の甗で、長胴形と胴張りの二種類がある。39・40の底部には網み物の圧痕が明確に認められる。41の須恵器坏は底部の切り離し技法が回転ヘラ切りである。42は灰軸陶器広口長頸瓶の頸部破片で、胎土が比較的堅密であることなどから尾張産のものと判断される。

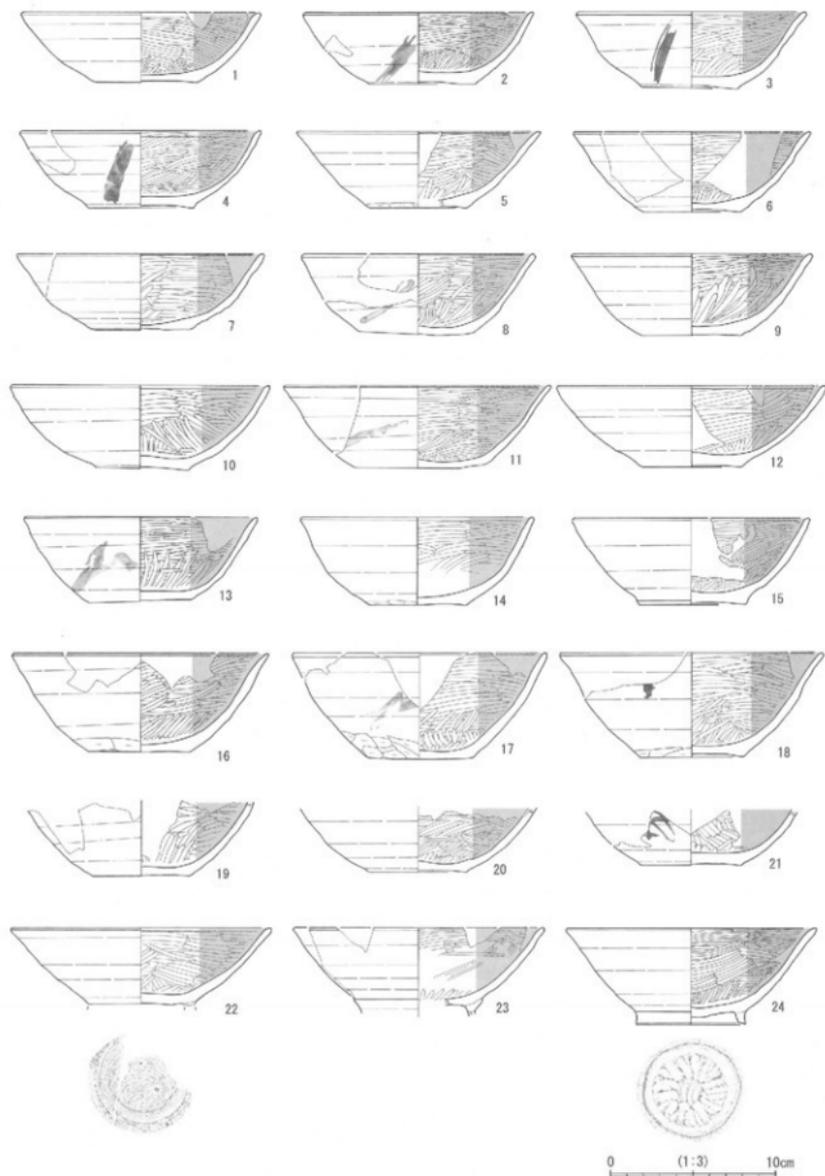


SK1土坑観覧表

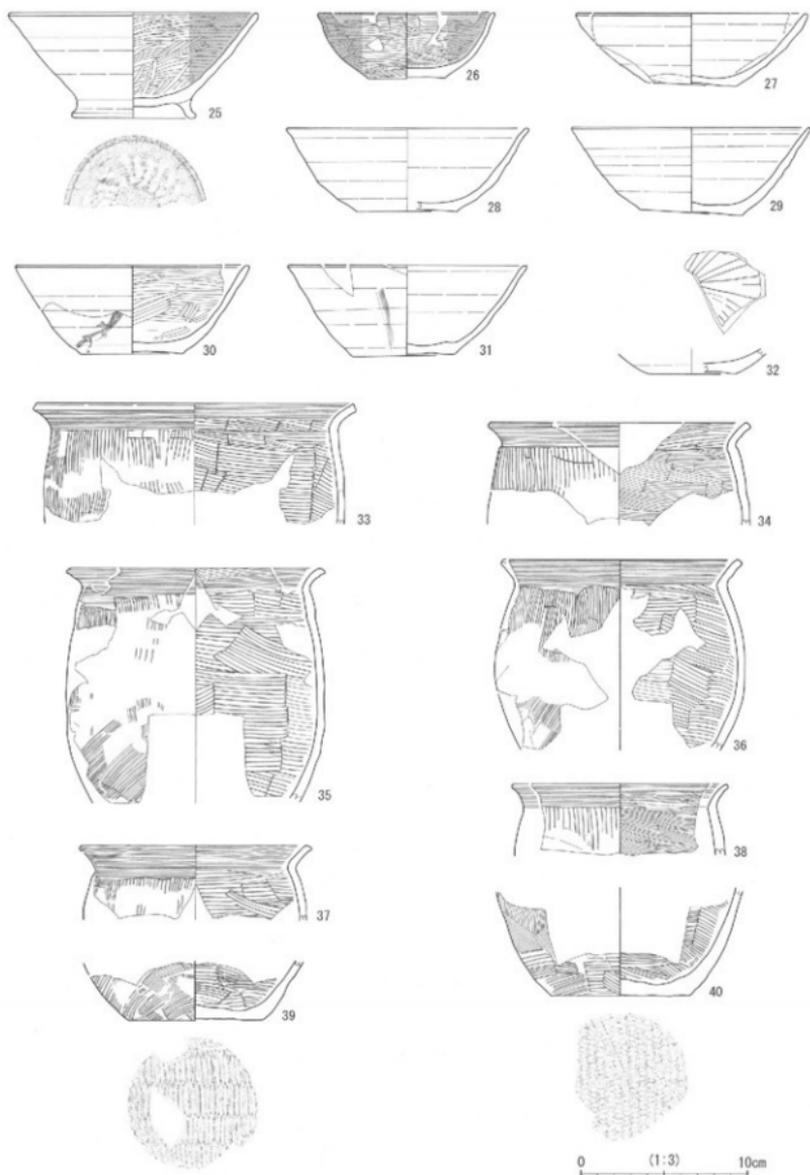
遺構名	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	層位	土色	土性	備考
SK1	方形	116×100	25	1	10YR3/2	黒褐色シルト	φ0.5~2mm級土塊を少量、炭化物を少量、10YR6/6明黄褐色シルトを少量含む。
				2	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト	10YR2/3黒褐色シルトと10YR6/6明黄褐色シルトを斑紋状に含む。



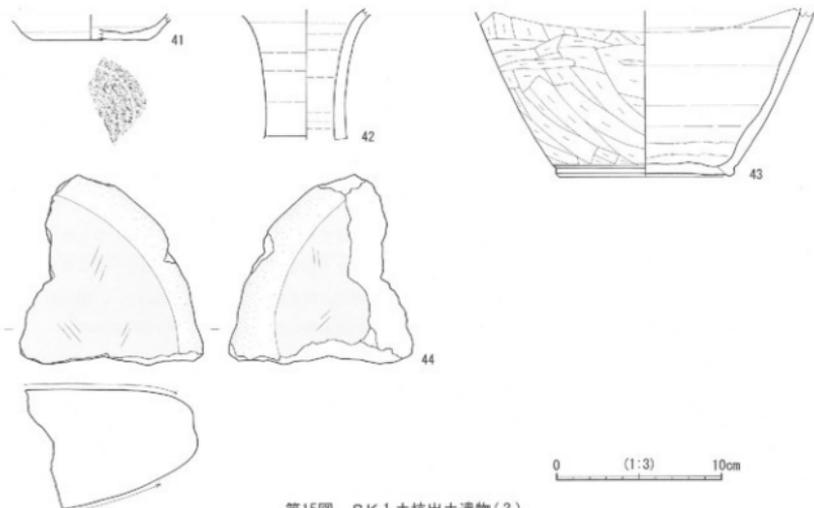
第12図 SK1土坑平面図・土層断面図



第13図 SK1土坑出土遺物(1)



第14图 SK1 土坑出土遗物(2)



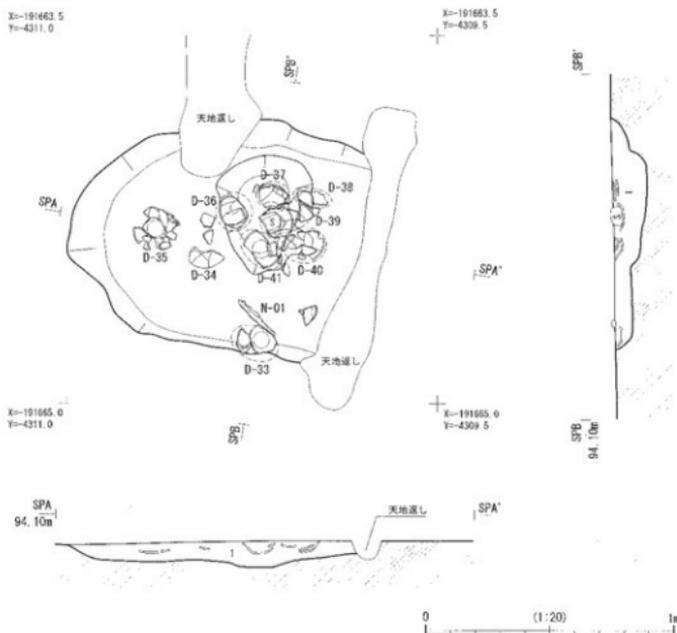
第15図 SK1土坑出土遺物(3)

調査年度	発掘番号	出土遺物	種別	種別	種別	目録不掲載品名(個数)	外面図説	内面図説	備考	写真掲載
1	D-14	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	14.4×6.5×2.4	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
2	D-18	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	14.4×6.5×2.4	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
3	D-17	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	14.4×6.5×2.4	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
4	D-15	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	14.4×6.5×2.4	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
5	D-16	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	14.4×6.5×2.4	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
6	D-13	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	14.4×6.5×2.4	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
7	D-12	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	14.4×6.5×2.4	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
8	D-14	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	14.4×6.5×2.4	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
9	D-10	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	14.4×6.5×2.4	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
10	D-15	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	16.2×8.6×6.1	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
11	D-16	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	14.4×6.5×2.4	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
12	D-17	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	14.2×6.2×6.3	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
13	D-12	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	14.2×6.2×6.3	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
14	D-12	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	14.2×6.2×6.3	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
15	D-12	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	14.2×6.2×6.3	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
16	D-29	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	15.4×6.6×2.6	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
17	D-10	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	15.4×6.6×2.6	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
18	D-30	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	18.9×8.5×6.4	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
19	D-28	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	15.8×8.5(1.6)	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
20	D-11	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	15.8×8.5(1.6)	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
21	D-10	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	15.8×8.5(1.6)	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
22	D-06	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	15.8×8.5(1.6)	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
23	D-44	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	15.8×8.5(1.6)	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
24	D-64	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	16.2×8.6×5.5	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
25	D-27	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	16.2×8.6×5.5	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
26	D-15	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	16.2×8.6×5.5	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
27	D-41	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	14.4×6.5×2.4	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
28	D-55	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	14.4×6.5×2.4	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
29	D-11	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	14.4×6.5×2.4	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
30	D-28	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	14.4×6.5×2.4	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
31	D-03	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	14.4×6.5×2.4	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
32	D-46	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	14.4×6.5×2.4	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
33	C-01	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	19.4×8×(7.2)	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
34	C-05	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	15.8×8×(6.2)	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
35	C-06	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	15.8×8×(6.2)	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
36	C-30	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	14.4×6.5×(11.1)	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
37	C-01	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	14.4×6.5×(4.1)	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
38	C-09	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	15.8×8×(4.1)	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
39	C-02	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	15.8×8×(4.1)	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
40	D-01	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	15.8×8×(4.1)	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
41	E-02	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	15.8×8×(4.1)	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
42	E-01	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	15.8×8×(4.1)	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9
43	E-01	SK1-1	網	ワタロシ土網	網	15.8×8×(4.1)	ワタロシナ、底面網糸入り	ヘタミ目	内面黒色染織	9

SK2 土坑 (第16・17図)

調査区のほぼ中央より確認され、位置的にはSK1の東側に隣接している。北側の一部と東側を天地返しにより築かれている。また上面が後世の土取りにより削平を受けているために、残存状態はあまり良好ではない。平面形は残存部分より楕円形と推定され、規模は残存部分で長軸118cm、短軸96cmを測る。深さは5~14cm程で、削平の影響もあり明瞭な掘り込みはみられない。堆積土は黒褐色シルトを基質とする。

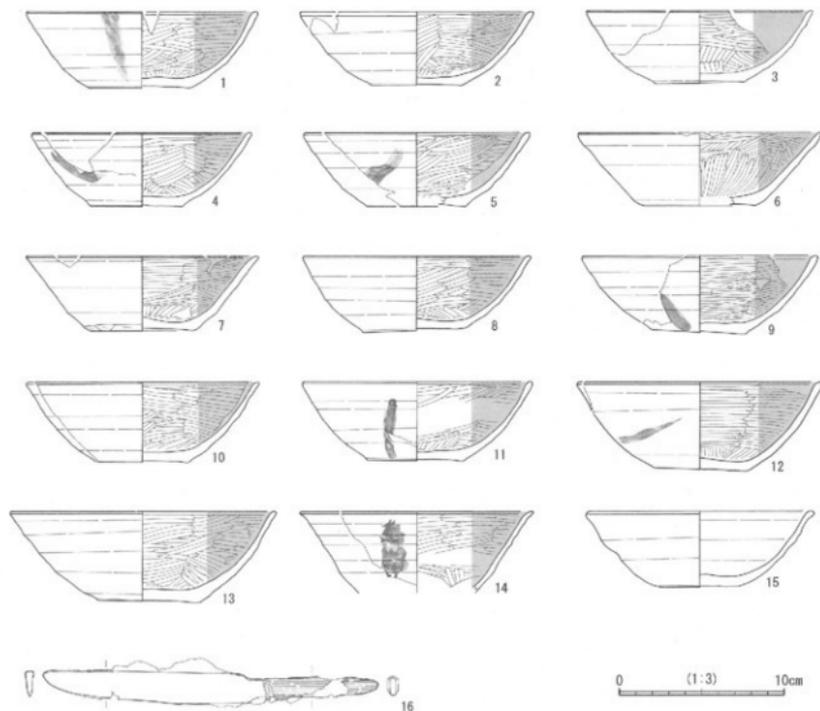
出土遺物には土師器では坏、高台付坏、甕、須恵器では坏、甕などがあり、そのほかには刀子が1点出土している。なお、隣接するSK1との接合関係は認められなかった。このうち図示したものは土師器坏15点と刀子1点である。1~14は内面に黒色処理が施された土師器坏である。器形としてはやや内湾気味に立ち上がるものが主体で、内面調整はすべてヘラミガキである。底部の切り離し技法は回転糸切りであるが、7のみ体部下端をヘラケズリで再調整している。16は略完形品の刀子である。残存状態は比較的良好で、研ぎ減りはあまりしていない。刃は刃・棟の両側にある両刃で、直角に近い状態で切り込まれている。基部には木質の柄の一部が残存している。



第16図 SK2土坑平面図・土層断面図

SK2土坑観察表

遺構名	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	層位	土	色	土性	備考
SK2	楕円形	(118)×96	14	1	101R2/3	黒褐色	シルト	101R6/1褐色シルトを斑状に含む。上部が削平を受けており極度に露れる。



第17図 SK 2土坑出土遺物

SK 2土坑遺物観察表

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	口径×底径×器高 (cm)	外面調整	内面調整	備考	写真 図版
1	D-41	SK 2	1層	土師器	坏	14.1×6.1×4.6	ロクロナダ、底部回転糸切り	ヘラミガキ	内面黒色処理、墨書	9
2	D-47	SK 2	1層	土師器	坏	14.2×5.4×4.5	ロクロナダ、底部回転糸切り	ヘラミガキ	内面黒色処理	9
3	D-48	SK 2	1層	土師器	坏	13.7×5.4×4.5	ロクロナダ、底部回転糸切り	ヘラミガキ	内面黒色処理	9
4	D-36	SK 2	1層	土師器	坏	13.4×5.6×4.5	ロクロナダ、底部回転糸切り	ヘラミガキ	内面黒色処理、墨書	10
5	D-49	SK 2	1層	土師器	坏	13.8×6.0×4.5	ロクロナダ、底部回転糸切り	ヘラミガキ	内面黒色処理、墨書	10
6	D-34	SK 2	1層	土師器	坏	14.9×6.7×4.5	ロクロナダ、底部回転糸切り	ヘラミガキ	内面黒色処理	10
7	D-35	SK 2	1層	土師器	坏	14.1×6.2×4.6	ロクロナダ、底部回転糸切り 一部部下腹子持ちヘラケズリ	ヘラミガキ	内面黒色処理	10
8	D-37	SK 2	1層	土師器	坏	14.9×6.3×4.7	ロクロナダ、底部回転糸切り	ヘラミガキ	内面黒色処理	10
9	D-50	SK 2	1層	土師器	坏	14.3×5.8×4.8	ロクロナダ、底部回転糸切り	細か4ヘラミガキ	内面黒色処理、墨書	10
10	D-51	SK 2	1層	土師器	坏	14.2×5.6×4.9	ロクロナダ、底部回転糸切り	ヘラミガキ	内面黒色処理	10
11	D-33	SK 2	1層	土師器	坏	14.0×5.8×4.9	ロクロナダ、底部回転糸切り	ヘラミガキ	内面黒色処理、墨書	10
12	D-40	SK 2	1層	土師器	坏	15.0×5.8×5.5	ロクロナダ、底部回転糸切り	ヘラミガキ	内面黒色処理、墨書	10
13	D-39	SK 2	1層	土師器	坏	16.2×6.2×5.6	ロクロナダ、底部回転糸切り	ヘラミガキ	内面黒色処理	10
14	D-52	SK 2	1層	土師器	坏	14.7××(5.0)	ロクロナダ、底部回転糸切り	ヘラミガキ	内面黒色処理、墨書	10
15	D-38	SK 2	1層	土師器	坏	13.9×5.2×4.7	ロクロナダ、底部回転糸切り		内面黒色処理	10
図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	備考				写真 図版
16	N-01	SK 2	1層	金属製基	刀子	断定形基、全長20.3cm、幅1.1~2.0cm、厚さ0.4~0.5cm。				16

(3) 性格不明遺構

SX1 焼土跡 (第18図)

調査区のほぼ中央より検出され、SK1・2の北側約1.2mに位置する。遺構の東側がP23により壊されている。規模は長軸75cm、短軸55cm、深さは10cm程度である。形状は不整な楕円形で、断面形は皿状である。堆積土は焼土を主体に構成される。本遺構からは遺物が出土していないため、構築時期に関する詳細は不明であるが、隣接するSK1の堆積土に焼土が多くみられることは注目すべき点である。



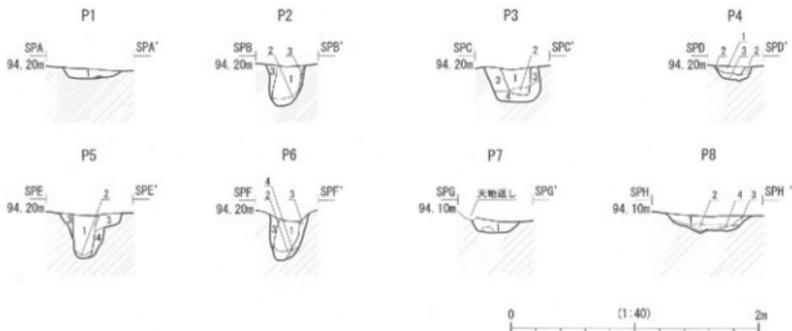
第18図 SX1 焼土跡平面図・土層断面図

SX1 焼土跡観察表

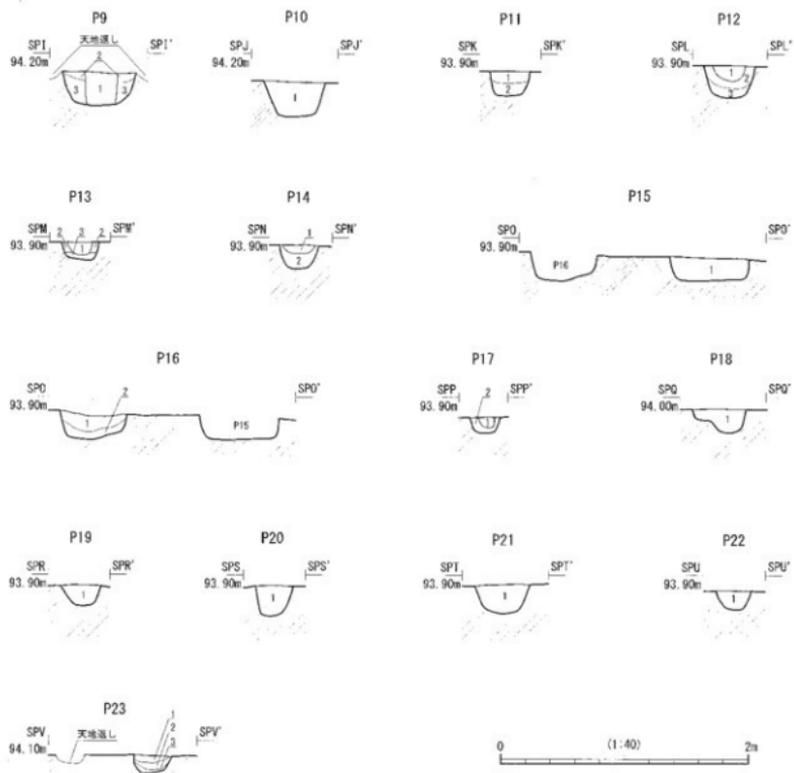
遺構名	平面形状	規模 (cm)	深さ (cm)	層位	土色	明・暗色	土性	備考
SX1	楕円形	75×55	10	1	S19S/6	明赤褐色	シルト	焼土主体。黒褐色シルトを微量含む。
				2	I0130/6	明黄褐色	シルト	焼土を少量。黒褐色シルトを微量含む。

(4) ピット (第19・20図)

調査区のほぼ全域より23基が検出された。規模は径30～50cm、深さは20～30cmのものが主体である。形状は円形を基調とし、断面観察では大半のピットから柱痕跡が確認されている。遺物の出土がほとんどみられないため時期の特定は困難であるが、堆積土が旧耕作土に類似していることから、比較的新しい時期の遺構と判断される。全体の分布をみると、東西・南北方向に列状に配列されている様相も窺えることから、耕作地の境界等に用いられた杭列や欄列の可能性も考慮される。



第19図 ピット土層断面図 (1)



第20図 ビット土層断面図(2)

ビット集計表(1)

遺構名	ビット	平面形	長×短×径 (cm)	深さ (cm)	層位	土色	土性	備考	
P-1	7	円形	48×48	12	1	10YR3/3	暗褐色	シルト	黄褐色シルト塊を斑紋状に少量含む。
					2	10YR3/3	暗褐色	シルト	片炭跡、φ1~3cm黄褐色ロームを微量、黒褐色シルトを微量含む。
P-2	7	不整形	48×38	40	1	10YR3/4	暗褐色	シルト	黄褐色シルト塊、にぶい黄褐色シルト塊をやや多く含む。
					2	10YR7/6	暗褐色	シルト	10YR8/1灰白色粘土質シルトをやや多く含む。
					3	10YR5/4	暗褐色	シルト	片炭跡、黄褐色ロームを微量、灰化物を微量含む。
					4	10YR5/8	暗褐色	シルト	片炭跡、暗褐色シルトを微量含む。
P-3	13	円形	44×39	29	1	10YR3/4	暗褐色	シルト	φ0.5~2cm黄褐色ロームを少量、黒褐色シルトを斑紋状に微量含む。
					2	10YR3/4	暗褐色	シルト	暗褐色シルト塊を微量含む。
P-4	13	円形	32×27	13	1	10YR3/6	黄褐色	シルト	暗褐色シルト塊を微量含む。
					2	10YR2/2	黒褐色	シルト	黄褐色ロームを少量、暗褐色シルトを微量含む。
					3	10YR3/4	暗褐色	シルト	暗褐色シルト塊を少量、暗褐色シルトを微量含む。
P-5	13	楕円形	51×32	41	1	10YR6/3	にぶい黄褐色	シルト	暗褐色シルトを微量含む。
					2	10YR3/3	暗褐色	シルト	片炭跡、黒褐色シルトを微量含む。
					3	10YR7/4	にぶい黄褐色	シルト	10YR8/1灰白色粘土質シルトをやや多く含む。
					4	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	黄褐色シルト塊、黒褐色シルト、暗褐色シルトを少量含む。
P-6	8	円形	33×29	45	1	10YR4/4	暗褐色	シルト	黄褐色シルト塊を斑紋状にやや多く含む。
					2	7.5B2/4	暗褐色	シルト	片炭跡、黄褐色シルトを均等に少量含む。
					3	7.5B4/4	暗褐色	シルト	φ3cm級の灰白色シルト塊を含む。
					4	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	黄褐色シルトを斑紋状に含む。

ピット集計表(2)

遺構名	グリッド	平面形	長×短×深 (cm)	深さ (cm)	層位	土色	土性	備考
P7	14	円形	43×39	14	1	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色シルト塊、暗褐色シルト塊、黒褐色シルト塊をやや多く含む。
P8	14・20	円形	60×56	14	1	10YR3/1 黒褐色	シルト	黄褐色シルトを微量含む。
					2	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色シルトを比較的多く含む。
					3	10YR3/4 黒褐色	シルト	黒褐色シルトを微量含む。
P9	14	円形	63×61	27	4	10YR3/5 明黄褐色	シルト	黒褐色シルトを少量含む。
					1	10YR3/4 暗褐色	シルト	柱状腐、φ0.5cm程度の10YR6/6明黄褐色シルト塊をごく微量含む。
					2	10YR3/6 明黄褐色	シルト	10YR3/1黒褐色シルトを斑紋状に少量含む。
P10	14	円形	49×42	30	3	10YR3/3 暗褐色	シルト	φ0.5~1cm明黄褐色シルト塊を微量、黒褐色シルトを微量含む。
					1	10YR3/4 暗褐色	シルト	φ1~2cm明黄褐色シルト塊を少量含む。
P11	22	円形	35×30	24	2	10YR4/4 暗褐色	シルト	φ1~2cm明黄褐色シルト塊を少量含む。
					1	10YR3/2 黒褐色	シルト	φ2~3cm明黄褐色シルト塊をやや多く含む。
P12	16	円形	42×37	26	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	φ1~2cm炭化物を微量含む。
					2	10YR3/4 暗褐色	シルト	φ1~2cm明黄褐色シルト塊を少量含む。
					3	10YR4/4 暗褐色	シルト	φ2~3cm明黄褐色シルト塊をやや多く含む。
P13	15	円形	32×29	14	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	φ1~2cm明黄褐色シルト塊を少量含む。
					2	10YR3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色砂質シルトを微量含む。
					3	10YR3/4 暗褐色	シルト	2.5Y7/1灰白色粘土質シルトを微量、φ3~5cm明黄褐色シルトをやや多く含む。
P14	15	円形	34×29	21	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	φ1~2cm明黄褐色シルト塊を少量含む。
					2	10YR3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色砂質シルトを微量含む。
P15	16	—	54×(32)	20	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	φ3~5mm炭化物を微量含む。
					2	10YR3/2 黒褐色	シルト	φ3~5mm炭化物を微量含む。
P16	22	—	53×(28)	20	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	φ3~5mm炭化物を微量含む。
					2	10YR6/6 明黄褐色	シルト	黒褐色シルトを微量含む。
P17	22	円形	28×26	11	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	φ1~2cm明黄褐色シルト塊を少量含む。
					2	10YR3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色砂質シルトを微量含む。
P18	15・22	楕円形	41×34	17	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	φ3~5mm炭化物を微量含む。
P19	16	円形	33×31	14	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	φ3~5mm炭化物を微量含む。
P20	16	円形	30×26	24	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	φ3~5mm炭化物を微量含む。
P21	10	円形	47×42	21	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	φ3~5mm炭化物を微量含む。
P22	10	円形	29×25	16	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	φ3~5mm炭化物を微量含む。
					1	7.5YR5/6 明褐色	シルト	粘土土塊、10YR3/3暗褐色シルトを微量、10YR7/6明黄褐色シルトを少量含む。
P23	8・9	円形	32×30	13	2	10YR3/4 暗褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルトを少量、10YR6/6明黄褐色シルトを少量、黄土を微量含む。
					3	10YR5/6 灰褐色	シルト	黒褐色シルトを斑紋状に含む。
					2	10YR3/2 黒褐色	シルト	

(5) 遺構外出土遺物

基本層Ⅱ層中からは、少量の遺物が出土している。これらは天地返しや倒木痕などにより攪拌された土層から出土している。出土地点はSK1及びSK2が位置するB区8・9グリッドが最も多く、本来はこれらの遺構に帰属していたものとみられる。ここでは特に残存状態の良い遺物を図示することとした。

1は土師器環である。製作においてロクロを使用しており、底部の切り離しは回転糸切り無調整である。法量は口径15.2cm、底径5.5cm、器高は4.5cmで、やや扁平感がある。胎土には白色針状物質（海洋性植物プランクトン）が多くみられる。本遺跡より出土している遺物を含めても、この胎土を有する土師器の出土は数点のみであり、比率的に非常に低いものと言えよう。2は乳息器高台付環である。高台部は底部回転糸切り後に貼付されている。



0 (1:3) 10cm

第21図 遺構外出土遺物

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	口径×底径×器高 (cm)	外面調整	内面調整	備考	写真掲載
1	D-53	8・9Gr.		土師器	環	15.2×5.5×4.5	ロクロナデ、底部回転糸切り	ヘラミガキ	胎土に白色針状物質含む。	10
2	E-03	8・9Gr.		土師器	高台付環	×7.0×(2.2)	ロクロナデ、底部回転糸切り →高台貼付→周縁漉ナゲ	ロクロナデ		10

第6章 仙台市一本杉遺跡第2次調査における火山灰分析

株式会社古環境研究所

1. はじめに

東北地方仙台市域とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層や土壌の中には、蔵王、安達、肘折、鴨子、十和田など東北地方の火山のほか、洞爺、浅間、御岳、大山、三瓶、阿蘇、始良、鬼界など遠方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる（町田・新井、2003など）。テフラの中には、噴出年代が明らかになっている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっていく。

そこで、層位や年代が不明な土層が認められた仙台市の平成21年度一本杉遺跡第2次調査の発掘調査区においても、採取送付された試料について、テフラ検出分析、火山ガラス比分析、さらに火山ガラスの屈折率測定を実施して、指標テフラとの同定を行うことになった。分析測定の対象は、S14の試料No.1である。

2. テフラ検出分析

(1) 分析方法

試料に含まれるテフラ粒子の定性的な特徴を把握するテフラ検出分析は、次の手順で行われた。

- 1) 試料13gを秤量。
- 2) 超音波洗浄による泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。軽石やスコリアは認めることができなかった。火山ガラスは多く含まれており、白色や無色透明の軽石型ガラス、また無色透明のバブル型ガラスが比較的に目立つ。

3. 火山ガラス比分析

(1) 分析方法

試料に含まれる特徴的な火山ガラスの量比傾向をみるために火山ガラス比分析を実施した。分析の手順は次のとおりである。

- 1) テフラ検出分析済みの試料について、分析篩により1/4 (2φ) ~1/8mm (3φ) と1/8 (3φ) ~1/16mm (4φ) の粒子を分別。
- 2) 偏光顕微鏡下で1/4 (2φ) ~1/8mm (3φ) の250粒子を観察し、火山ガラスの色調形態別比率を求める。

(2) 分析結果

火山ガラス比分析の結果をダイアグラムにして図1に、その内訳を表2に示す。分析対象となった1/4 (2φ) ~1/8mm (3φ) では、火山ガラスの比率が13.6%を占める。火山ガラスは比率が高い順に、繊維束状に発泡した軽石型 (8.0%)、スポンジ状に発泡した軽石型ならびに無色透明のバブル型 (各2.0%)、そして分厚い中間型 (1.6%) である。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

試料に含まれる1/8 (3φ) ~ 1/16mm (4φ) の火山ガラスについて、温度変化型屈折率測定装置 (古澤地質社製 MA10T) により屈折率 (n) の測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表3に示す。試料に含まれる火山ガラス (30粒子) の屈折率 (n) は、1.502-1.508である。

5. 考察

今回、分析測定の対象となった試料に含まれるテフラ粒子については、軽石型ガラスが多いこと、とくに白色のスポンジ状の軽石型ガラスが認められること、そして火山ガラスの屈折率 (n : 1.502-1.508、仙台地域のTo-aのn : 1.503-1.507、町田・新井、2003) などから、915年に十和田火山から噴出した十和田 a テフラ (To-a、大池、1972、町田ほか、1981、町田・新井、1992、2003など) が含まれている可能性が高いと思われる。

なお、火山灰編年学を利用する際には、野外での詳細な層相観察により、一次堆積層の認定を行う必要がある。また、To-aに関しては、趾長質で噴出年代も新しいために火山ガラスの粒径や保存状態により屈折率がテフラ・カタログと異なる場合がある (故新井房夫群馬大学名誉教授談)。とくに仙台市域とその周辺には、基盤の堆積物中に火砕流堆積物などガラス質のものが多く挟在されており、また周辺の火山から降灰したテフラも多い。

したがって、より高精度のガラス質指標テフラの同定には、そのほかに信頼度の高いEPMAによる火山ガラスの主成分化学組成分析の実施が望まれる。今後の検討をお願いしたい。

6. まとめ

仙台市一本杉遺跡第2次調査区のS14から採取された試料No.11について、テフラ検出分析、火山ガラス比分析、さらに火山ガラスの屈折率測定を実施した。その結果、十和田 a テフラ (To-a、915年) に由来する可能性が高い火山ガラスを多く検出した。

文献

- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス、東京大学出版会、276p.
町田 洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス、東京大学出版会、336p.
町田 洋・新井房夫・森脇 広 (1981) 日本海を渡ってきたテフラ、科学、51、p.562-569.
大池昭二 (1972) 十和田火山東麓における完新世テフラの爆年、第四紀研究、11、p.232-233.

表1 テフラ検出分析結果

試料名	軽石・スコリア			火山ガラス	
	量	色調	最大径	量	色調
S14・No.1	—	—	—	***	p m > bw, wh, cl

****: とくに多い, ***: 多い, **: 中程度, *: 少ない, -: 認められない。
最大径の単位はmm, bw: バブル型, p m: 軽石型, wh: f1, cl: 灰色透明

表2 火山ガラス比分析結果

試料名	bw (cl)	bw (pb)	bw (br)	m d	p m (sp)	p m (fb)	その他	合計
S14・No.1	5	0	0	4	5	20	216	250

bw: バブル型, m d: 中間型, p m: 軽石型, cl: 灰色透明, pb: 淡褐色, br: 褐色, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状, 数字は粒子数。

表3 屈折率測定結果

試料名	火山ガラスの屈折率 (n)	測定粒子数
S14・No.1	1.502 1.508	30

屈折率の測定は、温度変化型屈折率測定装置 (M A10T) による。

火山ガラス比

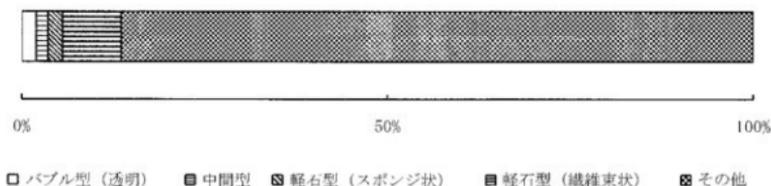


図1 一本杉遺跡第2次調査区の火山ガラス比ダイアグラム

バブル型 (透明)	中間型	軽石型 (スポンジ状)	軽石型 (繊維束状)	その他
2.0	1.6	2.0	8.0	86.4

第7章 まとめ

一本杉遺跡は、1980年代に行われた農学寮跡遺跡（宮城県教育委員会 1982）や一本杉A遺跡（宮城県教育委員会 1985）、一本杉B遺跡（宮城町教育委員会 1986）のトレンチ調査や確認調査によって広瀬川中流域右岸の河岸段丘上に形成された縄文時代並びに古代の集落であることが知られており、その拡がりは東西約900m、南北約350mの範囲に及んでいることが推定されている（仙台市教育委員会 1994）。

今回の調査では、限られた範囲ではあったが、竪穴住居跡1軒、土坑2基、施土跡1基、ピット23基などが確認された。遺構上面が後世の土取りや耕作等の影響により攪乱されている部分も見受けられたが、全体としてそれら遺構の残存状態は比較的良好であった。施土跡やピットに関する時期の詳細は不明であるが、竪穴住居跡や土坑の時期については出土した土師器が広義の「表杉ノ入式」に比定されることから、平安時代の所産と考えられる（氏家 1957）。

これらの詳細については前章までに述べた通りであるが、再度、今回の調査成果を示すと、昭和58年度の確認調査（宮城町教育委員会 1986）で発見され未調査のまま保存が図られていた竪穴住居跡を再度検出したこと、2基の土坑より多量の土器が得られたこと、そして土坑出土の遺物の中に墨書土器が多く含まれていたことなどがあげられる。ここでは当該地の平安時代の様相と、良好な資料が得られた土坑の性格及び土器の様相、墨書土器について簡単にまとめてみたい。

(1) 竪穴住居跡について

今回の調査で発見された竪穴住居跡は、昭和58年度の調査で検出された竪穴住居跡（SI4）に該当する。この時に調査された2軒の平安時代の竪穴住居跡は、SI4の東南東約65mの地点にSI1が、南南東約15mの地点にはSI2が位置する。規模はSI1が3.5m×3.0m、SI2が5.7m×5.0m、今回調査したSI4は3.8m内外でSI1の規模に近い。また建物の構造では、カマドが壁の角による隅カマドであること、柱柱穴を伴わないことなどの共通点があげられる。建物の構造や出土遺物の特徴を勘案すると、この3軒の竪穴住居跡はほぼ同じ時期である可能性が高いと考えられる。

一本杉遺跡全体の竪穴住居跡の分布状況を見ると、一本杉遺跡に包括される農学寮跡遺跡（宮城県教育委員会 1982）では300m×250m範囲内で竪穴住居跡が1軒、一本杉A遺跡（宮城県教育委員会 1985）では300m×200mの範囲内で竪穴住居跡が2軒確認されている。今回の調査地区の3軒を加えても、当地区では竪穴住居跡の分布は少なく散在的であることが指摘できる。

竪穴住居跡のカマド内からは土師器坏1点・甕2点・小甕1点が出土している。これらは製作に際してロクロを使用しており、表杉ノ入式に比定される資料と考えられる。なお、カマド左袖付近の床面直上より出土した灰白色火山灰の分析結果では、十和田aテフラ（915年降灰）に由来する可能性が高いとされている。

(2) 土坑の性格

2基の土坑は調査区のはほぼ中央より検出され、両者は並列した位置関係にある。遺構上面が削平を受けているが、2基の土坑からは表杉ノ入式に比定される土器がまとまって出土している。比較的残存状態の良いSK1からは約80個体の遺物が出土し、攪乱により遺構の約半分が覆われているSK2でも約35個体が出土している。検出状況から2基の土坑は共通した性格をもつとみられる。山上遺物の中には墨書土器が多くみられ、破片資料も合わせると土坑出土の土器の約30%を占めている。今回の調査で確認された墨書土器39点のうちSK1から25点、SK2から

12点が出土しており、SK1・SK2からは非常に多くの墨書土器が出土していると言えよう。記された墨書には、縦・横・斜め方向に線書きされた記号状のものが多く、判読不明ではあるが第13図-21のように文字に類するものもみられる。

また出土した遺物には、復元可能な個体資料とほとんど接合関係が認められない破片資料があるが、両者は入り混じった状態で出土しており、これらの遺物は破片を含め「括性」の高いものと考えられる。出土遺物には、土師器では坏・高台付坏・甕・小甕、須恵器では坏・瓶、灰釉陶器では長頸瓶などがみられる。組成の中心は内面黒色処理された土師器坏が主体である。

上坑の堆積土には焼土と炭化物が含まれており、特に残存状態の良いSK1では顕著に認められた。このような状況から、堆積土の形成にあたっては人為的な影響が及んだことが看取される。このように焼土や炭化物を含む土層とともに多量の上器が一括出土している状況や、遺物の中に墨書土器が多く含まれることから、土坑出土の遺物群は何等かの祭祀行為と関連した遺物群と考えることもできよう。

(3) 出土遺物の検討

今回の調査では、前述したように堅穴住居跡や土坑より表杉ノ入式に比定される資料が出土している。表杉ノ入式については、坏類の製作技法・形態などから細分がなされており、法量比（口径：底径）の推移、底部の切り離し技法の変化、土器の組成などに着目されている（宮城県教育委員会 1981）。このような観点から堅穴住居跡と土坑の出土遺物について再度検討することとする。

堅穴住居跡のカマド内からは土師器坏・甕・小甕が出土している。出土した土師器坏は僅か1点ではあるが、底部の切り離し技法が回転糸切り後に底部外周を手持ちヘラケズリで再調整するものである。器形は体部下端～口縁部にかけてやや内湾気味に立ち上がり、法量比（口径：底径）は0.47である。

次に土坑から出土した遺物の特徴をみることにする。土器組成としては土師器では坏・高台付坏・甕・小甕、須恵器では坏・瓶、灰釉陶器では長頸瓶などがみられ、組成の中心は内面黒色処理された土師器坏が主体で、全体の64%を占めている。器形としては体部下端～口縁部にかけてやや内湾気味に立ち上がるものが多くみられ、そのほかには直線的に立ち上がるものや口唇部が反外するものなどがある。坏の法量比（口径：底径）は0.36～0.51の範囲であるが、全体的に0.40～0.43に集中する傾向がみられる。また底部の切り離し技法は、回転糸切り無調整が全体の約82%を占め、回転糸切り後に体部下端にのみ手持ちヘラケズリによる再調整を行うものは約18%である。

土坑より出土した土器の特徴や組成は、多賀城跡出土土器編年（白鳥 1980）のE群土器に共通することが指摘でき、E群土器の年代については10世紀前半以降に位置付けられている。SK1・SK2出土土器群の特徴や組成などを考慮すると、土坑出土の遺物の年代は略10世紀前半代と想定されよう。

堅穴住居跡より出土した土師器坏は、底部の切り離し技法が回転糸切り後に底部外周を手持ちヘラケズリで再調整するものである。一方、土坑出土の土師器坏が体部下端にヘラケズリ調整を残すものが若干含まれているが、底部に再調整されるものはみられないことを考えると、堅穴住居跡の土師器坏は土坑出土の土師器坏よりもやや古手の様相とみることができる（宮城県教育委員会 1981 a～c）。したがって堅穴住居跡と土坑の年代については、若干の時間差を考慮する必要がある。

引用・参考文献

- 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史第14輯』東北史学会
- 小笠原好彦 1976 「東北地方における平安時代の土器についての二三の問題」『東北考古学の諸問題』東北考古学会
- 桑原滋郎 1969 「ロクロ土師器杯について」『歴史第39輯』東北史学会
- 白鳥良一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VII』宮城県多賀城跡調査研究所
- 仙台市教育委員会 1994 『仙台市青葉区文化財分布地図』
- 仙台市「宮城町誌」改訂編集委員会 1989 『宮城町誌 続編』
- 宮城県教育委員会 1980 『東北新幹線関係遺跡調査報告書IV—安久東遺跡』宮城県文化財調査報告書第72集
- 宮城県教育委員会 1981a 『東北新幹線関係遺跡調査報告書5—清水遺跡』宮城県文化財調査報告書第77集
- 宮城県教育委員会 1981b 『東北自動車道遺跡調査報告書V—東山遺跡』宮城県文化財調査報告書第81集
- 宮城県教育委員会 1981c 『東北自動車道遺跡調査報告書V—家老内遺跡』宮城県文化財調査報告書第81集
- 宮城県教育委員会 1982 『宮城県園場整備関係遺跡詳細分布調査報告書（昭和56年度）—農学家遺跡』宮城県文化財調査報告書第86集
- 宮城県教育委員会 1983 『宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第96集
- 宮城県教育委員会 1984 『鹿島遺跡・竹之内遺跡—七北田川流域自然環境上の平安後期の土器群』宮城県文化財調査報告書第101集
- 宮城県教育委員会 1985 『今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬継石塚』宮城県文化財調査報告書第104集
- 宮城県教育委員会 1998 『宮城県遺跡地名表』宮城県文化財調査報告書第176集
- 宮城町教育委員会 1973 『宮城町碧海塚発掘報告』宮城町文化財調査報告書第1集
- 宮城町教育委員会 1986 『宮城町の文化財』

写 真 图 版



1. 調査区全景（南東から）



2. 西区全景（北東から）



1. 東区全景 (南から)



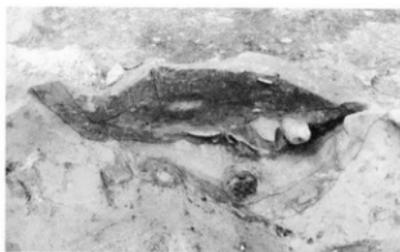
2. 西区S14, SK1, SK2全景 (南東から)



1. S14 全景 (西から)



2. S14 カマド遺物出土状況 (西から)



3. S14 カマド土層断面 (東から)



4. S14 灰白色火山灰出土状況 (西から)



5. S14 SK7・8 土層断面 (東から)



1. SK1、SK2 遺物出土状況（北から）



2. SK1 遺物出土状況（1層上面、南から）



1. SK1 遺物出土状況 (1層上面、南西から)



2. SK1 遺物出土状況 (1層上面、南から)



3. SK1 遺物出土状況 (1層上面、北から)



4. SK1 遺物出土状況 (1層上面、北から)



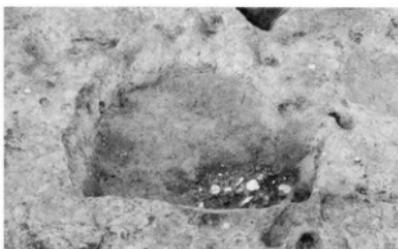
5. SK1 遺物出土状況 (1層上面、西から)



6. SK1 下層遺物出土状況 (1層下面、南から)



7. SK1 土層断面 (南から)



8. SK1 完掘全景 (南から)



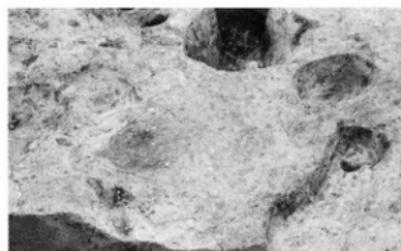
1. SK2遺物出土状況（南から）



2. SK2遺物（刀子）出土状況（南西から）



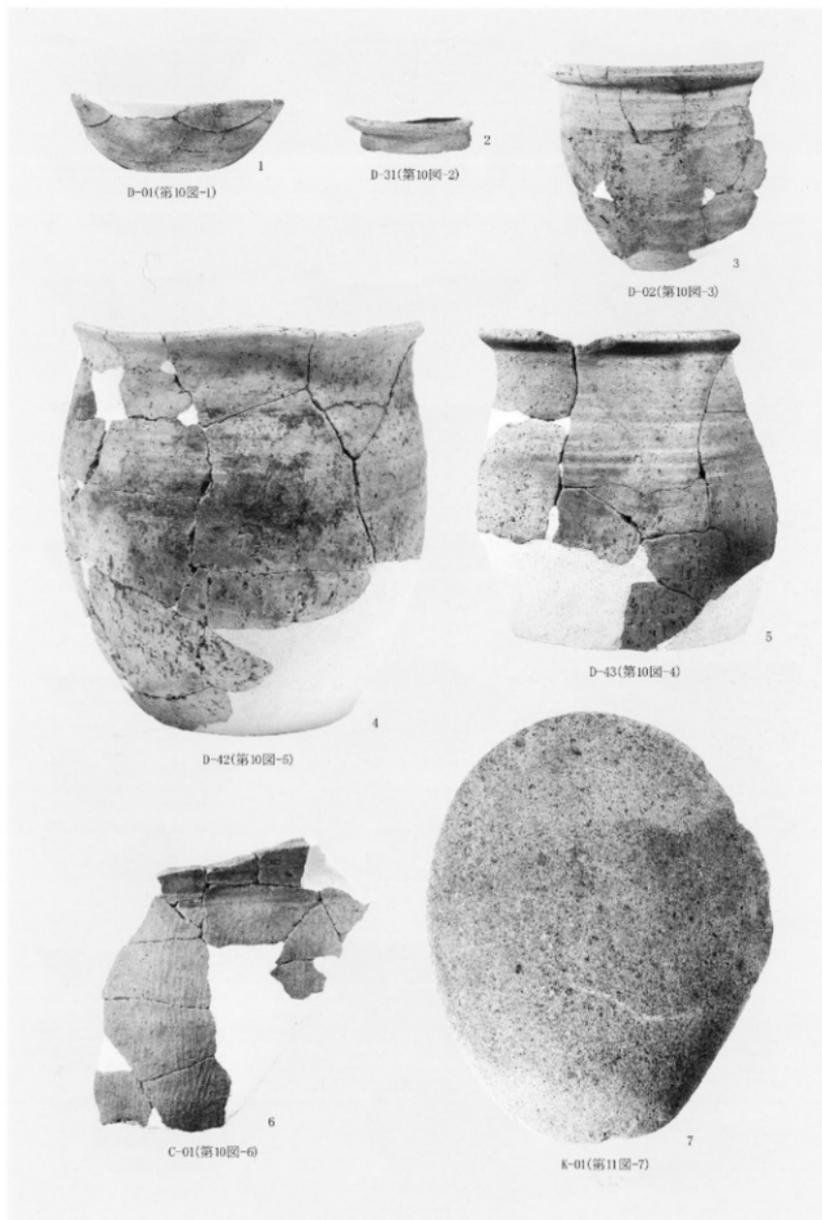
3. SK2遺物出土状況（北から）



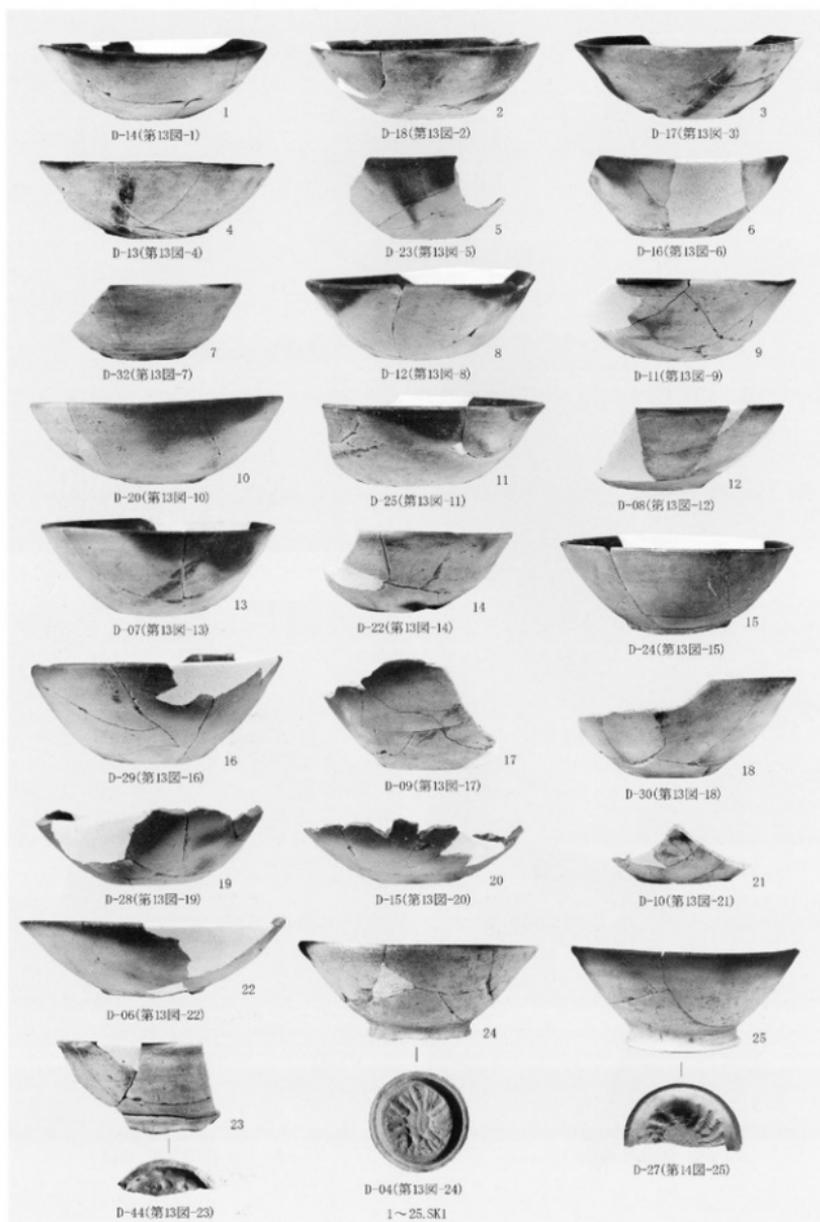
4. SX1焼土跡検出状況（南から）



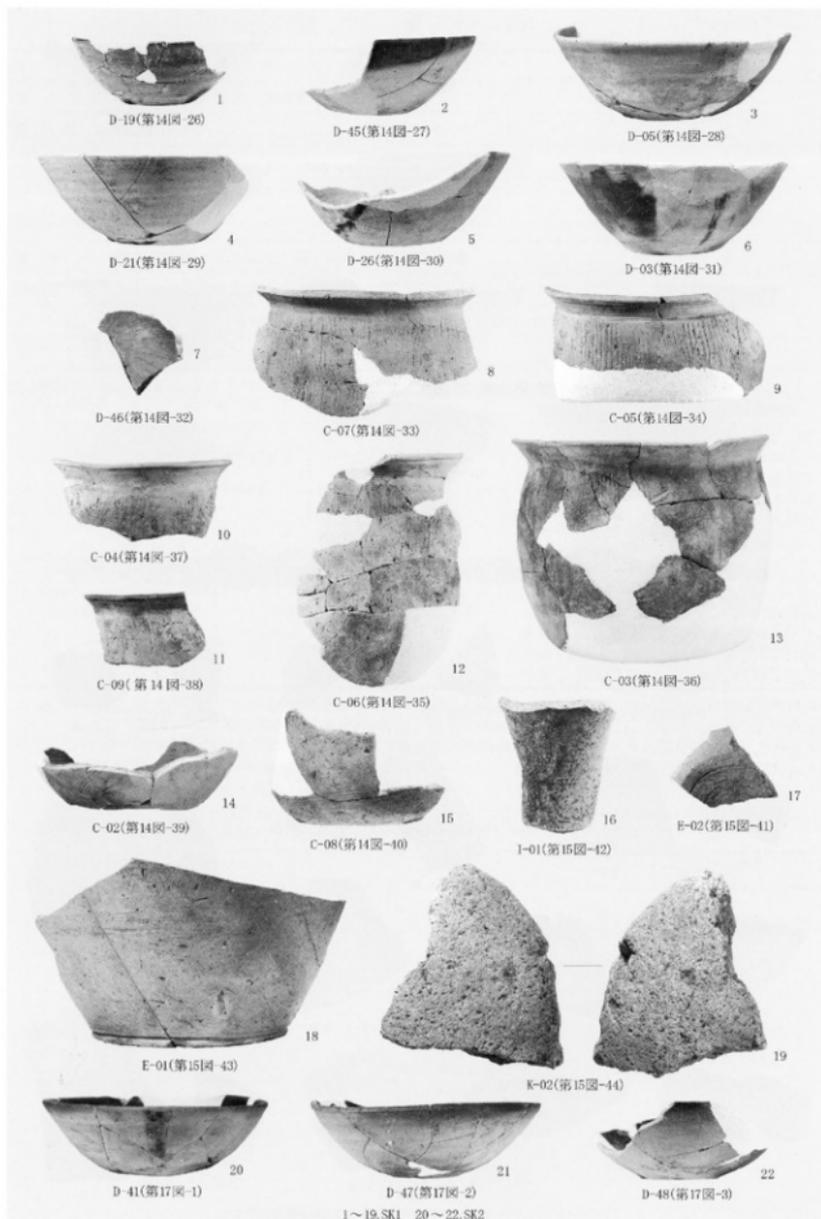
5. SX1焼土跡土層断面（南から）



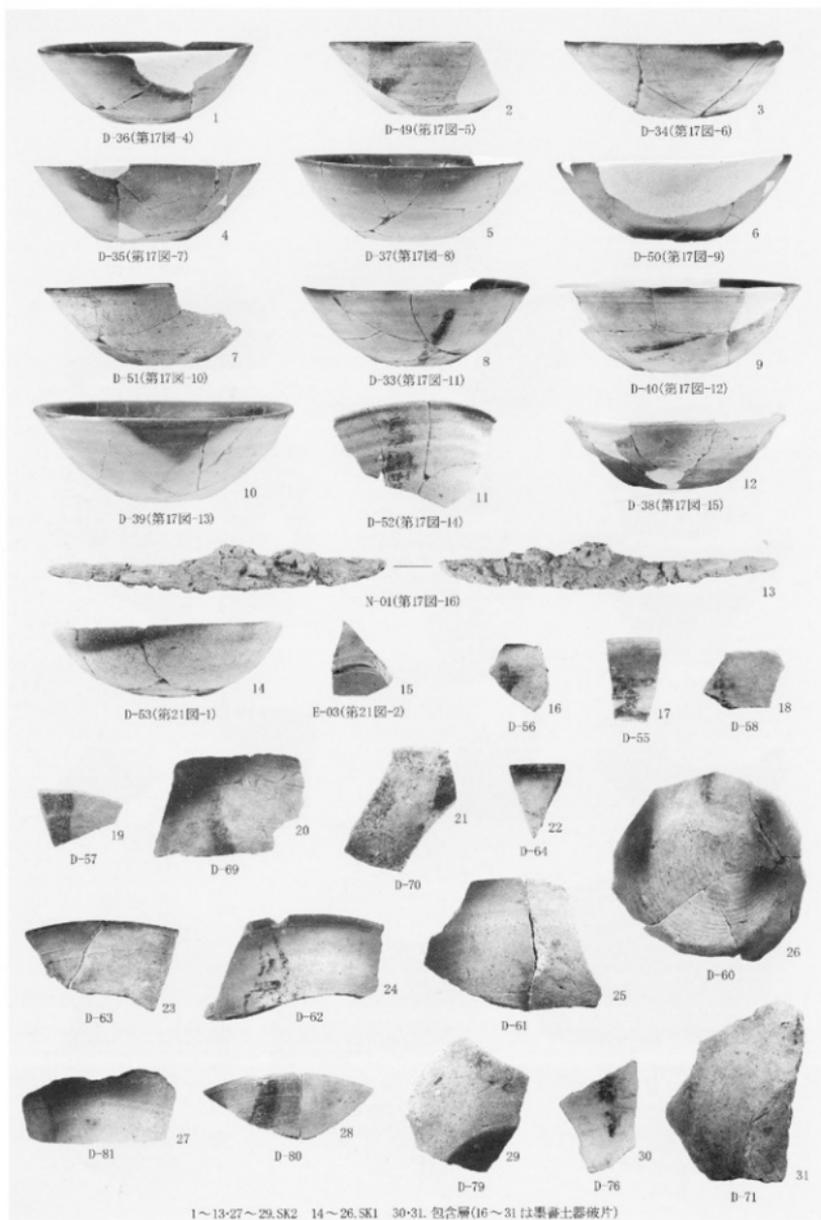
写真図版 7 竪穴住居跡出土遺物



写真図版 8 土坑出土遺物(1)



写真図版 9 土坑出土遺物(2)



1~13、27~29.SK2 14~26.SK1 30~31.包含層(16~31は黒赤土器破片)

写真図版 10 土坑出土遺物(3)・遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いっぽんすぎいせきだいじちりょうさ							
書名	一本杉遺跡第2次調査							
副書名								
巻次								
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第369集							
編著者名	工藤信一郎・荒井 格・石川貞紀・西本正憲							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-8761 宮城県仙台市青葉区二丁目1-1 TEL.022-214-8894							
発行年月日	2010年3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'"	東経 °'"	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いっぽんすぎいせき 一本杉遺跡	みやぎのんさんだいにしおほびく 宮城県仙台市青葉区 ねふあいはらちりょうの ほん 落合四丁目446番 2	21	133	38° 16' 24"	140° 47' 2"	2009.09.14 ～ 2009.10.22	576	(仮称)新 栗生保育所 創設整備事 業に伴う埋 藏文化財の 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
一本杉遺跡	集落跡	平安時代	竪穴住居跡 土坑 焼土跡 ピット	1軒 2基 1基 23基	土師器 須恵器 磯石器 金属製品	多量の墨書 土器を伴う 廃棄土坑が 確認された		
要約	<p>一本杉遺跡は広瀬川中流域右岸の河岸段丘上に立地し、1980年代以降に行われた数回にわたる調査によりその拡がり東西約900m、南北約350m、総面積は約315,000㎡に及ぶことが推定されている。今回の調査地点は当遺跡範囲の南端部にあたり、限られた調査範囲ではあったが竪穴住居跡1軒・土坑2基・焼土跡1箇所・ピット23基が確認された。竪穴住居跡からはロクロ調整された土師器環や甕・小甕などが出土している。また2基の土坑からは、墨書土器を含む多量の土器群が 括廃棄された状態で出土している。竪穴住居跡や土坑の年代については、出土遺物の特徴から10世紀前半頃の所産と考えられる。</p>							

仙台市文化財調査報告書第369集

一本杉遺跡第2次調査

2010年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区二丁目1-1
仙台市教育委員会文化財課
022-214-8894

印刷 (有)平電印刷所

福島県いわき市平北白十字
西ノ内13番地
0246-23-9001

